329
170

始

329
170

國民教育

新作淨瑠璃

渡部松菊齋著

彩文館發行

329-170

國民教育 新淨瑠璃

日本海大海戰

馬艦隊擊滅の段

渡部松菊齋作

はや東雲のほのめきて舷を打波音も、いとゞ激しき日本海、三笠艦の司令塔に凜然として座乘ある大日本海軍の鬼將軍、東洋のネルソンと稱へられ世界に威名を轟かす聯合艦隊兼第一艦隊司令長官東郷大將、軍艦すぐつて七十餘隻、約三萬の勇將猛卒、渺茫たる海原も所狹しと備へたり、比しも皐月の末つかた二十七日朝まだき、濟州島の島陰に、豫て見張りの信濃丸より敵艦見ゆとの報知により、旗艦三笠は戰闘旗を檣高くぞ掲げゝる、時に東

大正 2.5.20 交付

郷大將は旗艦三笠の艦頭に揮ひ立てたる信號旗、ヤヨ三萬の兵もの原謹んで承はれ、我帝國の興廢は繫つて、是此一擧にあり、全軍奮勵努力せよと旗物言ねと嚴そかに布き表わせる號令は神代の昔海原を治め給ひし素盞雄の大神の御聲と聞へけり、全軍大ひに奮ひ立、實に千歲の一遇と腕を擦り四股を踏み敵艦遲しと待かけたり、斯る折しも敵方は口提督の率ゐたる無慮五十隻の大艦隊、水や空やの冲合より、二行に並んで雁がねの渡るがごとく寄せ來り、浦汐海に入らんとす、待設けたる日本艦隊は見るより砲門開き海上宛然修羅の巷、一直線に進み行、縱陣變して忽ちに眞一文字を描けるは是横陣と號くなり、二行に並んで海原を翔る形ちは雁行陣、山の如き高波に懸渡したる梯子の樣は之れ梯陣というぞかし、敵か魚鱗と備ふれば、我鶴翼と押つゝみ、巴

の如く廻ると見ゆれば忽ちのびて長蛇と成り千變萬化の奇術を盡し、双方ひつしと鳴響く水雷砲火爆烈の轟ろき渡るは百雷の一時に落來る如く也、我精鋭の砲先に何かは以て堪るべき、戰鬪艦ホロジノー、アレキサンダー始として十三隻の敵艦は或は沈み或は燒け、無慘といふも餘りあり、擊洩らされし敵艦は叶はじとや思ひけん、ノツトを速めて東北へ遁るをやらじと追て行、我艦隊の其勢ひ勇ましかりける有樣なり、四海波風靜まりて曇りし空も晴渡り、仰ぐも高き大御國の神の佑けも長しへに幾世經ぬかはしらぬひのつくしも果てぬ大稜威此に對島の濱邊村、年古ふ住む女夫連、彼の高砂の尉と姥か、昔噺の祖父祖母にも見擬ふ計り睦まじく、今日も濱邊の松原に枯葉拾ふて居たりしが、祖母は傍らに箒を直しノヲ親父殿昨日から沖の方で大砲の音

がするがアリヤまあ何で有ろふなア、いつもの竹敷沖の演習とは違ふ樣ちやがのノ祖父「チー婆々ありや去年から噂のあつた、露西亞のバルチツク艦隊といふ軍艦が、何でも去年の十月頃あちらの國を出掛けたそうなが、夫れが漸々此比日本海へ來るとかと聞たが、大かた夫れが東鄕樣や上村樣や片岡樣といふ樣な豪い方の目にかゝつて、夫れで軍が始つたのだそうな、ごうぞマア日本が勝つてもらい度ものちやノ祖母「チヽさうかいノコレ親爺殿、其上村樣の事について目出度嬉しい噺がある、いつか〳〵と思ふて居たが恰度よい太ほ、サヽ、下に居て聞て下され祖父「ヤア何だそんなやぶから棒に目出たい話とは、サ聞てやろ早ふ噺せ、やごつこゐしよと腰おろし祖母「是は昔噺しさ祖父「婆々そんなら分つた、大かた老爺は山へ柴苅ちやろう祖母「イヤそうでござらぬ三十

年前の昔話、わしが連子のお豐がまだ二ツの乳呑盛り、不思議の縁でこなたと連れ添ひ、又お前にも先きの連合の殘されて往なれたほんそ息子の勝太郎、三ツ違ひの義兄弟、ふりわけ髪の友育ち、云はず語らず行末は夫婦にせうと思ふ内、ごうした事か勝太郎はきつふ酒が好きになり、夫れが本で色々の道樂して、内を外律義一てつのお前故、腹立られて廢嫡さつしやれ、家出して行方しれず、お豐は段々成人し、年比になつた娘をいつまで獨り置く事もならず、アノ勇次郎を聟に取つて福松といふ孫まで產れ睦しう暮すにつけ、ア勝太郎はどうしてぞ家出してから八年餘り、梨子もつぶてもある事か雨につけ風につけ案じ暮して居る中に人の噂に朝鮮の釜山で、漁師の仲間に入り、船のりになつたと聞たが祖父「コリヤ婆、又しても勘當した悴の事、夫はもう耳へたこ

しや何が目出たいエ、面白くもない祖母「マ……さう言はずと最少し先まで聞て下され、是からが目出度噺しの肝心肝問、その船乗が上手になつたを幸にいつか海軍の水兵に成り上り、先つきお前の噺の上村樣の艦隊へ乗り込、去年の八月朝鮮の蔚山沖で露西亞の軍艦を打沈めた時大きな手柄をしたといふ、是をしほに親父殿に勘當の詫事してくれとナ、コレわしが今までかくしだてしたと悪ふ思ふて下さるなよ、必らず腹を立てゝ下さるなよ實はなさぬ中の此わしへ母樣〳〵と書て私の名當で軍事郵便とやらいふ手紙をおこしてくれ、其中にも兩親とも段段取る年ゆへ、親父殿にも母ちやにも孝行がしたいとの、さうやさしう成ましたわいノ祖父「ヤコレ〳〵婆又怜の事いやるかいのう、能うものを考へて見い、やさし聟の勇次郎にさへ養ふて貰ふが氣の毒

さに足手の動く間は獨で働くが人間の勤めだと、我を張て居る俺が、勝が出世したと聞て勘當を許しては養ふてでも貰ひたさか水くさいと思わるゝも無念な、聟殿のよい志につれて、お豊までがやさしい、たつた五ツの孫までか俺を血をわけた祖父ちやと思ひ俺が柴苅に往て歸ても荷も卸さぬ先に腰のまわりにぶら下つて、祖父樣〳〵今日は何を土產か、猫のちやんからか、雀の玉子か早ふおくれ祖父樣〳〵とあまへくさる嬉しさ、俺や今では孫より外に可愛い者はないわい祖母「ソレ其の樣にいうて下さる程こなたの本そうの勝太郎を勘當さして見ては居られぬ義理、殊に聟の勇次郎も去年からの戰爭で三笠艦に乘込んで軍に出て居る事ゆへ御國の爲にいつ何時討死せまいものでもない娘一人ではまさかの時に力ない、どう有ても勘當の詫事コレ機

嫌直してやつて下され祖父「ハテ扨くごい人やノ勝太郎とて同じ事いつ戰死するやもしれぬが俺や悴奴は出世しよふと、どうせふと少しも當にはせぬ、肝心の智はどうちや日本海軍の神樣といわるゝ東郷大將樣の乘つて御座る三笠艦に居るとの事、こんな名譽の事はない、俺やもう他人の事は聞たくないはい祖母「そふお前がもぎごふに云わしやれば私も又智や娘の噺は聞たふ御座らぬ祖父「エ兎角俺に逆ろふて我を張るのが惡い祖母「エヽこなたもわるいと互に寶の子を捨てゝなさぬ事をば思ひ合ふ曇らぬ心、日の本の神の御國の習はしかや、左のみはいかゞと折れはもはやう祖母「チヽ最うよござる、夫に從ふが女の道、わしが方から負けて出ませう、枯松葉も澤山拾ふた、サア連立つて歸りませうと立歸らんとする處へ、濱邊傳ひに勢ひ能く、駈來る新聞賣子、夫と

見るより祖父は呼びとめ祖父「アヽモシ新聞屋さん、その新聞は何で御座ります賣子「コレハ昨日から今日午前までの、日本海大海戰大勝利の號外で、此先の大濱村まで持て行くのさ祖父「ヤレ〳〵夫は目出度事、私は三笠艦に少し義理のある者が乘組で居ますが三笠艦は無事かいのう賣子「アヽ三笠艦は東郷大將の旗艦ちや、無事で大勝利サ祖父「ヤレ〳〵嬉しや婆聞たか三笠艦は無事でしかも大勝利ちやといノ大かた智の勇次郎もと半分聞ず祖母は立寄り祖母「モシ新聞屋さん出雲といふ軍艦は無事かいナア賣子「出雲は第二艦隊司令長官上村中將の旗艦、之も同しく無事の大勝利サ祖母「アレ親爺殿アレ聞てか出雲艦も無事ちやといのふ大かた息子勝太郎も祖父「エヽ婆俺や出雲を聞ては居らぬ三笠艦か大勝利ちやとよ祖母「イヤ出雲艦が無事ちやとチヽ嬉しや祖父「イヤ夫よ

り三笠が祖母「イヤ出雲が、と夫婦互ひに言ひ募り果しなければ新聞賣子中に入賣子「アゝ爺さん待つた、婆さんもだまつた、お前方は妙な事爭ふが、此度の大合戰はそんな誰か彼といふ樣な少さな事ぢやない、我日本惣体の大勝利、聯合艦隊の大勝利で最と大きくいふたら世界始まつてこんな大勝利はないといふのだ、其証據として此號外讀んで聞かしてやりませうか、しかし讀んだ計りでは分りにくい處もあらう、や斯うしやう、此號外の意を飜譯して聞習ひの軍書講談、修羅場もどきに講釋して聞かせませう祖父「ヤレ〳〵それは面白からうどふぞ能く分る樣に聞して下さりませ賣子「ヨシ〳〵そんなら先づ聯合艦隊の編制から、陳立の有樣實際に委しく演じます序に去年からの海戰に恐れ多くも宮樣方も三殿下御乘込に成つて居らつしやる實に古今未曾有

の大海戰の大勝利だから是に御苦勞なされた重立た將校方の御名前位は國民の義務として覺へて居らねばならぬ事だと傍への石に腰打掛け扇おつとり、しかつめらしく賣子「抑も歴史あつてより世界の七大海戰を我日本の年號に宛てはめて見れば天正の十五年英利西國とスペインとアーマタの戰を始とし、文化元年英國と佛蘭西、西斑牙連合軍、トラフアルガーの大軍、慶應二年伊太利と墺太利のリサの役、明治二十七年に日本と清國の黄海戰、明治三十一年には米國と西斑牙とマニラとサンチアーゴとの一年二度の大軍明治三十八年の五月廿七八日、日本海の大海戰と合せて七大海戰あり、取わけ今度の戰爭は前古無類の大勝利、世界平和の輝きと近き未來に見るべきの基を立し動功を我日本の民族は永き紀念と傳ふべし、扨も露國の勢いは、兵

隊凡そ五百万、國は一千万方里、亞細亞大陸を二分して、世界の一等強國と威し文句で滿洲を濡手で粟の攫み取り、十年間の經營にて漸く成れる旅順口も、マカロフ將軍陣沒し、東洋艦隊先づ亡び、浦塩艦隊又沈み、俄に國中騷き出し、曾て世界を一週し六大洲に名を得たる、ロゼストウエンスキー提督は、露國皇帝の命を受け軍艦六十餘隻を率ゐ時しも三十七年の國を守りの神無月、十六日の前一時クロンスタットを艦出して、大西洋の長の旅降る霜月も早過て師走の中の三日の日、漸々爰まて喜望峯、前途は遙か中々に、マダマスカルで年を越ね旅順開城の初夢にとふの眠りの皆目さめ、浪のり船を急がせてシンガホールの險を越ね、六日のあやめ十日の菊、土用過ぎての暑氣見舞、彼岸明けての配りもの、遲そ蒔きの唐がらし、二度植の糸瓜のごとく後ればせにも

漸々と支那海近く攻來る、是なん世界に名も高き、バルチック艦隊也、茲より先東郷司令長官は、全艦隊を三艦隊、七個戰隊に分ち、第一艦隊長官は、大將自ら之を兼、第二艦隊司令長官は去年蔚山沖の海戰に露軍艦リウリツクを擊沈たる時、麾下各艦の將卒に向ひ既に戰鬪力を失ひたる敵兵は力の及ぶ限り之を救助せよ、苟くも私の怨を以て之に接する事勿れと、博愛慈仁の號令して敵兵の溺るゝ者、六百餘名を救ひ上げ、怨に報ゆるに德を以てし、日本武士道の精華を發揮して、一大美譚を全世界に轟したる海軍中將上村彦之丞閣下也、第三艦隊司令長官は維新函館の戰爭を始として、爾來數回の海戰に三十餘年一日の如く、必ず毎戰參加して常に偉勳を顯はされし海軍中將片岡七郎閣下也、其第一戰隊は三笠・朝日・富士・敷島・春日・日進の六艦より成、司令長官は三

十七年三月六日、第一回浦汐進擊の當時、上村艦隊麾下司令官にて浦塩要塞及艦隊へ激烈なる攻擊を與へ敵軍の士氣を沮喪せしめたる海軍中將三須宗太郎閣下也、第二戰隊は出雲・吾妻・淺間・常磐・八雲・磐手の六艦より成、司令官は嚮に第一艦隊參謀長として東郷長官の左右に侍し、帷幄に參與せられたる海軍中將島村速雄閣下也、第三戰隊は笠置・千歳・音羽・新高・龍田の五艦にて司令官は去年四月十三日旅順第七回攻擊の際第一遊擊隊の任務を受用心深き提督マカロフ中將をして十五哩の沖合まで誘ひ出したる頓智機敏の名將海軍中將出羽重遠閣下也、第四戰隊は浪速・高千穂・對島・明石・千早の五隻より成、司令官は今回戰爭の最先最初の魁將軍にして一面には第一軍の陸兵を掩護し仁川港へ恙なく上陸せしめ他面には一艦一兵を傷けず、敵艦ワリヤーグ、

コレーツ、スンガリーの三隻を攻擊自滅せしめ、其豪勇と機敏とに一驚を喫せしめたる海軍中將爪生外吉閣下也、第五戰隊は巖島・橋立・鎭遠・松島の四艦より成、司令官は去年八月十四日蔚山沖大海戰に參加して一擧浦汐艦隊を擊滅したる海軍少將武富邦鼎閣下也、第六戰隊は須磨・秋津洲・和泉・千代田の四隻より成、司令官は曾て我陸軍が大孤山上陸前三日、其艦隊を率ゐて金洲灣に威赫砲擊を開始し敵軍をして我軍の上陸地を勃海方面ならんと思ひ違をなさしめ、大孤山附近の備へをお留守にしたる跡へ安〳〵と上陸なさしめたる牽制行動は時に取ての妙計奇策なりと當時彼我の耳目を聳動せしめたる海軍少將東郷正路閣下也、第七戰隊は扶桑・高雄・摩耶・鳥海・筑紫・宇治・八重山の七艦より成司令官は曾て第五戰隊司令官と成り旅順攻圍軍援護の要砦砲

擊封鎖强行等に從事せられ毎戰偉勳を顯されし、海軍少將山田彦八閣下也、時は五月二十七日濛氣も深き曉に濟州島の沖の邊に豫て見張りし信濃丸より敵艦見ゆとの知せに依り待ち構へたる我軍は天の佑けと雀躍し各艦隊は總員を甲板上に寄せ集め何れも艦長の發聲にて　天皇皇后兩陛下の萬歲を三唱し、各艦の將卒は、腕を擦り四股を踏み、スワヤ時こそ來れりと軸艫を啣みて錨を拔く、時に戰艦敷島は、艦長大佐寺垣猪三君、加德水道の入口に有しを以て、第一番の魁となり、針路を南東に取りて港口を出て進み行く、第二番は富士艦にて艦長大佐松本和君、第三番は朝日艦、其艦長は誰なるぞ去年五月第二軍上陸前に、海軍陸戰隊の組織あるや志願者千有餘名の中より撰拔せられ、其大隊長に任命せられたる、大佐野元綱明君也、四番は春日次は日進此

兩艦は同盟の英利國の媒介にて去年の二月十六日我横須賀の軍港へ嫁入り來りし姉妹艦、春日艦長大佐加藤定吉君日進艦長大佐竹内平太郎君と共に四月十三日初陣の功名に旅順港内の間接射擊を行ひ、市内造船所鳩灣の新砲台老虎尾威遠の兩砲臺へ猛烈なる砲擊を加へ爆烈破壞せしめたり、續て進む通報艦龍田艦長中佐山縣文藏君殿艦に當りたり、次には第二戰隊上村長官の旗艦なる出雲艦を先に立、艦長大佐伊知地季珍君第二番には吾妻艦、其艦長は名にし負ふ千代田艦長たりし時北清警備の任務に當り、開戰に至る前八千哩を航海し、又仁川に手引して、初開戰の大捷利を得せしめし大佐村上格一君也、次なる淺間の艦長は仁川の戰に敵艦を前に控へ、尺八を以て千鳥の秘曲を奏し、綽然として雅量沈勇を表し、赤壁の曹操か、足柄山に簫を奏でし

新羅三郎の昔を偲ばしめ一度敵艦の近付くを見るや猛然起て鬼神の如く殊に部下の鬼少佐白石荑江が指揮し居る前砲八吋砲をして日露戰爭の序幕開きに、第一番の火蓋を切りたる大佐八代六郎君也、次なる八雲艦長は二月九日旅順第一回攻擊に、敵の快速巡洋艦ノーヒツクを猛擊して退却せしめたる大佐松本有信君、扨其時の戰に海軍少佐山階宮菊磨王殿下には本艦分隊長の御職務を以て後部八吋砲塔に就かせ給ひ敵艦ノーヒツクの列を離れて突然五千米突まで進み來るを御覽ぜられ、直ちに猛擊せられたるに敵艦側に命中せり、程なく敵より發する六吋砲、殿下の砲塔に中り、殿下を離るゝ僅に二尺計りなりしも、幸に爆發せず、しかも殿下には御心に介せられず、益々射擊を努めさせ給ひ、遂に擊退せられしといふ、御勇戰の程申すも畏こし、次ぎ

は常磐艦々長大佐吉松茂太郎君續く磐手艦長は大佐川島令次郎君、通報艦千早艦長は先きに砲艦赤城に長として、去年十一月廿日、旅順攻圍軍が二百三高地を攻擊するに當り、セントアツプス山の麓に投錨し、諸砲臺の砲火を冒して援助砲擊に從事し、同日濟遠の遭難に際しては直に之に赴き、死者生存者一百餘名を收容し、機敏と勇敢を以て顯れたる中佐江口麟六君也、扨其後方の右側には第二驅逐隊司令大佐矢島純吉君、第五驅逐隊司令中佐廣瀨順太郎君、同左側は即ち四戰隊涙速艦長大佐和田賢助君、高千穗艦長大佐毛利一兵衛君、明石艦長大佐字敷甲子郎君、對島艦長中佐仙頭武央君の四艦之に續き、其後方遙に第十九艇隊司令中佐關重孝君、第十四艇隊司令中佐松岡修藏君之に尾し、又第一第二戰隊の左側には第一驅逐隊司令大佐藤本秀四郎君第三

驅逐隊司令中佐吉島重太郎君、第九艇隊司令中佐河野早治君並進めり、時に午前六時十五分聯合艦隊司令長官東郷大將は旗艦三笠に座乘せられ鎭海灣より急航し來り本隊に合したり、其艦長は去年八月十日黃海の大合戰に於て名譽の負傷を被られしも武運目出たく再び參加せられたる大佐伊知地彦次郎君也扨其時を回顧すれば此時此役に於て本艦負傷者人名中に、伏見宮博恭王殿下の御尊名を拜するに至ては恐懼の至りに堪へざる所なり、殿下は海軍少佐の御資格を以て本艦分隊長として、最危險なる艦尾十二吋砲臺請持を以て、東郷大將は御附武官金子少佐に内意を含められ殿下には今日丈け艦首の方へ御代らせ給ふ方宜からん趣、言上に及ばれし處、殿下には以ての外の御氣色にて此大事の戰に臨み持場危險のために他の砲臺に代る程な

れば、寧ろ始めより從軍せざるにし如ずと、御承引なく益々御奮鬪を續け給ふ折柄、敵の彈丸御軍服の袖を掠め去り御袴も御膝の下まで裂け御軍帽及望遠鏡も甚しく破損せり、當時殿下の前後左右に多數の死傷者を出し鮮血迸りて御軍服を汚し參らせ頗る慘憺の景況を呈したり、しかも殿下には輕微なる御負傷に止まらせ給ひしは御幸運の程申すも畏こし之を見參らせし全艦の將卒皆感激し、一死報國の念を益々固からしめたり、扨旗艦三笠は各艦の眞先に位置し速力を十五節に增加して進み、自餘の諸艦も列序を追ふて進む、旌旗堂々として曉風に飜り、威儀颯爽海洋を壓し、實に空前絶後の大壯觀筆を以て書くべからず、口以て言ふ能はざる形容なり、時に午前七時内方警戒の任務に在りし哨艦和泉の艦長は二月九日旅順第一回攻擊の際、第一第三

の同僚驅逐艇と共に不意に港口に押寄せ敵戰鬪艦ツレサレウ井ツチ、ウ井ザレ、巡洋艦アスコリド、バルラダの四隻に大破損を與へ初陣の高名を美事に成功したる大佐石田一郎君より敵艦の近付來るを報告せり、又第五戰隊巖島片岡長官の旗艦に大佐土屋保君艦長たり、續く鎭遠艦長は首め司令官欠乏の時先任艦長として本戰隊の指揮官に任せられたる、大佐今井兼昌君次なる松島艦長は、去年六月敵軍南下の報傳はるや、海軍陸戰隊指揮官となり、二個中隊を率ゐ得利寺方面に進發し陸軍の應援に勉められし大佐奥宮衛君、續く橋立艦長は大佐福井正義君通報艦八重山艦長中佐西山實親君、第六戰隊須摩艦長は去年五月十二日より開始されたる大窯口の掃海作業に從事せられし大佐栃内曾次郎君次き秋津州艦長は廣瀨軍神の實兄にして先きに砲

艦大島艦長として去年五月十七日金州灣に肉薄し、鐵道架橋其他建造物を擊破し又運兵列車の通るを認め之を破擊して高名を博したる大佐廣瀨勝比古君、其次千代田の艦長は畏れ多くも金枝玉葉の御身を以て戰友部下と齋しく慘苦を嘗させられ給ふ御美德の聞え畏こき東伏見宮依仁親王殿下に在し奉る也、殿下は海軍大佐の御資格を以て、哨艦御勤務中の一端を伺ひ奉るに一夜なりとも御寢室に入らせ給ふ事なきは勿論一度も軍服を解せられし事なく、天候荒れ風波大なる時には數時間の久しき或ひは猛雨に曝され玉ひ或ひは暴風に吹かれ玉ひ艦橋に在して御指揮を遊ばさるゝ際には餘りの御事に思ひ奉りて或時は御附武官が暫らく御休憩遊ばさるゝ樣言上する事もありしに殿下には御承引なく、いやとよ艦の運命は艦長の責任にかゝ

る我之を盡さゞるべけんやと之を承るもの誰か奮勵して死を願はざる者あるべき今更申上るも畏こし、之に續て第三艦隊笠置艦長は首め細谷戰隊に屬し、陸軍援護の任に當り、奥大將の率ゐたる陸兵十二萬の運送船六十艘を掩護し五月五日壇大澳に恙なく上陸を終らしめたる大佐山屋他人君、次なる千歳艦長は仙頭對島艦長と共に八月十五日、黄海の大戰に敗走したる敵艦ノーヒツクがコルサコフへ遁込みたるを追かけ、味方一人の損害なく到々追詰めて自滅せしめたる大佐高木助一君なり、抑も此ノーヒツクは故のマカロフ中將が理想通り設計せられたるものにして僅々三千噸の二等巡洋艦に過きずと雖も、一時間能く二十六浬の快速力を有し、毎戰敵の先頭第一に立常に我將士の賞贊する處なりし、此戰に於て現千代田艦長東伏見大佐宮殿

下本艦副長にて在せし時御奮戰遊はされたりと承る、二月九日には山階少佐宮殿下の御勇戰を煩し奉る、彼のノーヒツク遂に爆沈せられたるも猶餘榮ありといふべき歟、扨また音羽艦長は、先例無類の壯烈なる旅順閉塞の献策者の一人、而も二月廿四日、三月二十七日、第一第二の閉塞に、總指揮官の任に當り、武名を世界に輝かせし大佐有馬良橘君、次の新高艦長は大佐庄司義基君等午前十時十一時の比對島壹岐の間に於て敵と出合はん手筈にて時々刻々に敵情を無線電信にて告け來る、遊擊隊に充りたる第七戰隊旗艦扶桑艦長は首め第四驅逐隊司令として旅順を夜襲し敵義勇艦隊カザン及旗艦ペトロホウロスクを擊破して奇巧を奏し有難き　勅語を賜りたる大佐長井群吉君也、宇治艦長は野津大將の率ゐたる拾萬の陸軍上陸に當り、同僚七艦長と

共に大孤山上陸掩護に從事したる中佐金子・滿喜・君也、赤城艦長・中佐羽喰・政次郎君、摩耶艦長・中佐藤田・定吉君、鳥海艦長・中佐牛田・從三郎君等皆旅順封鎖强行偵察掃海作業等に從はれたる勇將なり、その他各艇隊長を始として戰艦凡そ七十余隻を率ゐ、萬夫不當の猛將勇卒、約三萬と註せられたり、時稍々正午を過る此、霞める沖の島邊に黑煙一筋又二すじ、次第に見ゆる數十條、スリヤこそ敵艦こさんなれと、瞳を定めて見てあれば、確かに敵は右翼の先頭に、ボロジノ型戰艦四隻の隊を置き、チスラヒヤ、シソイベリキ、ナフリン、アドミラルナヒモフの一隊左側の先頭に位し、續いてニコライ一世、セムチユーク、イツムールト、オレクバルラ、ドミトリトンスコイ、ウラジミルモノモフ其他特務船等雁の列を並べたる如く、數哩に亘りて續々進み來る、爰に至りて旗艦三笠

の檣高く戰鬪旗を掲ぐ、それを見より各艦皆之に倣ひて同時に戰鬪の令は下つたり、此時に聯合艦隊司令長官は見ゆる限りの全艦隊の兵員に信號を以て督勵して曰く、皇國の興廢存亡は繫つて是此一戰にあり、各自奮勵努力せよと凛乎たる此命令は正に千載の下猶懦夫を起しむべき、實に乾坤一擲的伸るか反るかの、有史以來の一大合戰たるを万世に傳ふべき天來の大福音なり、彼の京童べが信號遲しと見上る空に努方せよとの神の聲とは此有樣を唄ひしなんめり、曾て世界の海戰史上に特筆大書せられたる英國子ルソン將軍が信號を以て全艦隊を督勵し、遂に佛蘭西の聯合艦隊を全滅し偉大の効蹟を立たる事は是迄子ルソン將軍の獨り占の名譽なりしも、我東郷大將の効蹟はより以上なりと世界列國口を揃へて賛め立るも偶然にあらざるべし

却説吾艦隊は彼との距離八千五百米突となるや敵艦は周章て我に向つて打出した、幸に砲彈は屆かずして我艦の前に落るや忽ち逆立つ水柱は鯨の汐吹くごとくなり、去れとも我は默して應せず滿を持して未だ放たず、正に之れ山雨來らんと欲して風樓に滿るの有樣悠然として徐ろに機の熟するを待受たり、時は午後二時過ぎに六千米突に近くに及び始めて旗艦三笠は火蓋を切れり各艦齊しく砲門を開き猛烈に敵の兩先登を砲擊せり、敵は之に對抗し得ず、俄に楫を東南に變じ自然不規則なる單從陣を作りなし、我艦と並行の態度を取つたなれども其左翼の戰鬪艦オスラビヤは瞬く間に擊破られ大火災を起して戰列を離れたり、我艦隊は其距離の近づくに從つて三萬の將卒唯一念君國に報ゆるの丹心凝たる彈丸なれば、なご一發も空しからん皆

悉く命中し、旗艦クニヤースはクニヤ〳〵と成つて列を退、敵の陣形いよ〳〵乱るゝに隨て我は益々勢ひを得、或ひは横陣或は縱陣、梯陣と爲り雁行陣と變じ、魚鱗と並ひ鶴翼と張り、巴まんじと廻ると見れは、忽ち延ひて長蛇の如く、錬りに錬り鍛ひにきたひし陣法を千變萬化に運用し、爰を先登と攻立れば、敵艦なごか堪るべきセムチユーリはせむ術を失ひ、オスラビヤはおさらばと沈み、スワローはすはつて動けず、遂にボロジノに火がついて見る〳〵内にやけ沈み、跡には何もナヒモフと成たればアレキサンドル三世はあきれて三度氣を失ひ、とゞ敗軍の總計は、戰鬪艦八隻の内六隻は打沈められ、殘る二隻は捕獲され、巡洋艦九隻の内四隻は沈み、一隻碎け、殘る四隻はマニラの方へ遁る處を捕へられ海防艦の三隻は捕られたり、沈んだり、驅逐艦の九隻は、四

隻は沈み、四隻は捕られ殘る一隻は上海は、逃げて武裝を剝ぎとられ其外假裝巡洋艦、又特務船の四五隻は、砲門碎け舵折れて哀れや揚る降參旗、武勇名高き敵長官ロセストウエンスキ將軍も鬱陵島の島影に擒と成しいたましさ、七十に垂んとする老體の身を提げて祖國の運命を双肩に擔ひ、六十隻の大艦隊を率ゐ、二萬有餘の將卒を統べ、一萬三千海里の長程を乘込み來り、劒折れ矢盡るまで力戰したるは實に露國の驍將たるを失はず、情に於ては憫むべく、勞に於ては多とすべし、敵軍とは言へ四海の同胞此末路を思ひ來れば轉た同情の感に堪ざるものあり、爰が所謂大和魂君子國民の大襟度なり、敵の死傷八千人、捕虜が六千七百人、味方の損害極めて少なく、開闢二千六百年世界古今に類ひなき、此大勝利を得たるのは、我帝國の臣民は天より稟けたる大和

魂、武士道氣質があれはなり、忠孝節義の猛烈に發動するが武士道なり、身を殺して仁を爲すもの武士道なり、生を捨て義を取る事武士道なり、大義親を滅するもの武士道なり、人は一代名は末代なるもの武士道なり、一諾千金より重きもの武士道なり、此武士道が堅まつて斯くも目出度度勝利、山は青々海清く、空に輝く日の御旗、日本海軍萬々歳、日本帝國萬々歳ア、あんまり饒舌つてくたひれたどうぞ爰らで水一ぱい、呑ましておくれと語りける、ヤヽ餘り講釋が身に入りて最う夕方に成て仕まふた號外配達遲なつた爺さん婆さん左樣ならとしやべり散らして急ぎ行く跡に二人は悅びに女夫喧嘩も打忘れ祖父「こんな嬉しい事はないノチ祖母「チヽ、親父どんほんに此樣な嬉しい目出度事は御座らぬ祖父「チヽ、目出度ども〳〵大方聟の勇次郎も勳章提げて歸らふ

よ祖母「ホンニ息子の勝太郎も勳章戴いて歸りませう、チヽ親父殿その時は是非勘當ゆるして下されや祖父「チヽゆるす共〳〵以前は蕩樂しよう共、今度は皇國の御用に立つたのだもの夫れに免じてゆるさにやならぬ祖母「チヽ嬉しい事〳〵悴殿も出世して祖母「チヽいとしの聟も手柄して、敵艦は全滅し、日本の大勝利、有難い〳〵サア〳〵婆早ふ歸つて嫁にも聞かせ、神棚へ神酒でも供へ國旗を立て祝いませう、勇み悅び嬉しさ紛れ日の暮れまぎれ、拾ひし松葉も打忘れ、子供の樣に浮れ立、祖父は熊手を引かたけ、旗行列の眞似すれば祖母も箒を差上けて東鄕大將も勝ちやげな、上村中將も勝ちやげな、片岡中將も勝ちやごよ、聟も悴も手柄して、日本海軍大勝利、帝國萬々歲と勇んで我家へ立歸る。(完)

八代將軍淺間艦長の當時親友なる長崎市五島町松尾福三郎氏へ寄せれらたる書翰の全文揚げて本段の序文に換ふ

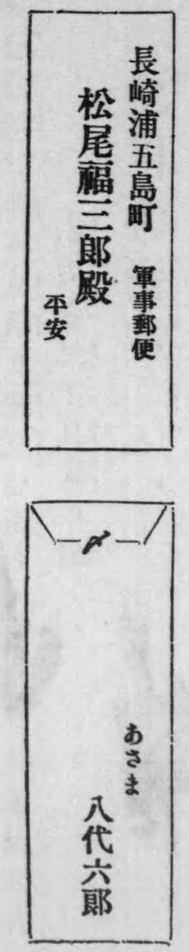
肅啓早速御祝詞を賜はり御芳情奉感謝候。仁川の一擊は、序開にて。殊に淺間艦は獨力(ワリヤーク)を擊破致し候は、何の大功に候べき、淺間を態々仁川方面に差遣はされしは。全くワリヤークが有し爲にて。若し淺間が彼を擊洩らし候はゝ。大なる耻辱にて小生は再び男役は勤り兼可申候。依て小生は彼を破らずんば必らず死すべしと決し。コレーツと共に出來り候時には即時に錨鎖を斷ち進み出候故思ひ通り擊破したる次第に御座候。他艦も後れたるには無之、錨を上げ居り候爲少く時間延び申たるに候。戰鬪前総ての準備を整へ小生は緩々晝食をしまい。或ひは之が最後かと存じ。尺八を取出し「千鳥の曲」を吹き吹きて「君が御代をば

八千代とゞ鳴」に至り。將に相の手に移らんとする時副長と三番分隊長馳來り「艦長敵艦が出て來る」と報じ候は何と面白くは候はずや。是は斷の樣に候へ共全くの事實に候、去廿四日は海軍の驍勇士七十九名（原書のまゝ）旅順口を閉塞せん爲め。商船五隻に取乘り死地に切入り候ひしが。充分成効不致廿五日には旅順口前に於て小戰致し候得共。双方共損害なく。交綏致候。先は御禮旁戰況の一部、申上度如斯に御座候匆々敬具

二月廿七日　六郎

松尾仁兄大人

追て御同苗松尾三代治殿は近況如何御都合に候や又御愛子は嘸御健全に御成長の事と奉拜祭候。御令閨其他皆々樣へ宜敷御傳聲被下度候。生命萬一存じ候はゞ。拜眉の上尺八一曲御聞に達すべく候。



國民教育

新作淨瑠璃

仁川初海戰

渡部松菊齋著作

淺間艦長千鳥曲の段

文明を世界に求め友邦と交際を親うし。東洋平和を保たんとは、我　皇君のみこゝろなり、此事露國に容れられず、一朝善隣の好み破れ、秋津島根に立波に翼を鳴らす舞鶴城、東郷鎭守府將軍は勅命畏こみ奉り、聯合艦隊長官と、新たに戴く月桂冠、三笠艦を旗艦と定め嚴そかにしく軍令に、響きの音に應ずる如く、馳せ參じたる艨艟は、輝く朝日を首めとして、初瀨敷島富士八島、軍艦勝つて三十七隻、恰も明治の三十七、としの數えを其儘に、三艦隊と七

戰隊、威氣天を衝く壯ら雄が、皆戈とりてたつの春、また如月の空寒く、砲口吼ゆる風音も、いと凄まじき海原に、艦出をいつと松浦灣、佐世保の港に集まりける、されば第一艦隊は、大將自から兼ね率ゐ、其第二艦隊は、上村中將長官に任じ、旗艦出雲に座乘せり、第三艦隊長官は片岡中將承はり、嚴島を旗艦と定む、七戰隊の旗艦には、初瀨に八雲秋津洲、千歳浪速と扶桑艦、之を率ゐる司令官は、梨羽三須出羽瓜生東郷細谷の六將軍五隊に分つ驅逐艦水雷廿一艇隊、各任務定まりて、將卒三萬威氣高く、揚る朝日の御旗影輝く四海八口浦の、集合地点に着にけり。

爰に第四戰隊瓜生海軍少將は仁川港に碇舶の露艦二隻の攻擊と我第一軍陸兵の運送掩護を承はり、二つの任務を双肩に擔ふ名譽の初陣に率ゐる艦は魁の梅に因みの、浪花艦、君が稜威は高

千穂の、月は淺間か明石艦新高對馬と列序を整し、早艦を解きければ、東郷司令長官は出艦を送る賸けに、豫かじめ其成効を祝すと掲げし信號旗瓜生將軍謹んで厚意を謝すこの返し言、旗物言はねど慇懃にかはす互ひの式禮は、仁義の國の戰艦、見ゆる限りの艦員は、皆甲板に立並び別れを送る登舷禮君が代祝ふ樂隊の洋々たる音に送られて仁川さして進み行、時しも二月九日の風まだ寒き海原に立や煙りの淺間艦、今日初陣に敵艦を邀へ擊べき命を受け艦長八代大佐を首め滿艦の勇士一同に準備おさ〳〵怠りなし、艦の行手を見定めて危險を避くる航海長、敵と我との距離りを測り定めし彈丸を標的はづさず射さしむるは、砲術長の職務とや、其外機關士防火隊、水主揖取とそれ〳〵に承くる任務は替れ共かはらぬものは奉公の忠義の心一すじに練り來り

たる益良雄が腕をさすり四股を踏み、敵艦遲しと待かげたり髀肉に堪えぬ兵もの原、甲板に寄りこぞり。

「時に兵曹長殿昨日敵艦コレーッが小癪にも先きに發砲したのは殊勝でしたが我艦隊の優勢に驚いたか忽ち仁川港へ遁込んで仕まい折角の獲物を取遁したは殘念でございました。

「サ今分隊長の話で聞たが艦長殿へ無線電信の樣子では高千穗千代田に送られて往た陸兵は昨夜の一時近ふ皆恙なく上陸を了りて我瓜生司令官閣下は敵艦ワリヤーク艦長へ直接談判を開ひて早く沖中へ出て勝負を決するか左もなくば爰で打放さふかと飛車手王手の談判中又仁川に碇舶中の英米伊佛四ケ國の軍艦からも交戰國の軍艦が中立港に停舶するは違法だかうと云て立退を談じられて居ると云から今にも出て來るだら

う、最早俎板の上の魚同前、さしみにするも塩燒にするも夫はこちらの手按排、此初物の料理番に、我淺間艦が當つたは、名譽こいはふか幸福か、悅びの限りぢや

と勇み立たる其有樣、まだ戰はぬはじめより、勝利の程は知られけり。かゝるふしにも吳竹の、尺八の聲嚠喨と、艦長室の窓洩りて舷を打波音を、くぐりて通ふ千鳥の曲、寬治のむかし足拵の、月に奏でし源冠者の舊にし事の偲ばれて實に英雄の胸の裡、餘裕にも又ゆかしけれ

塩の山さし出の磯にすむ千鳥、君が御代をば、八千代こそなく

妙なる調べ悲傖の曲、聞く滿艦の壯良雄は、感に打れて腸を、ずたゝに斷つ思ひなり、かゝる折しも遙かなる月尾島のかげより

もたな引く二條の煙こそ必定敵艦ござんなれ、いざや進んで

淡路島通ふ千鳥の啼聲に幾世ねさめぬ須磨の關守次第〳〵に近付て、距離鮮明に成りければ

「艦長敵艦が見えました、「八千五百、「八千、「七千五百と報する聲に艦長は心靜かに吹おさめ、機は至りぬと艦頭へ、現はれ出たる八代大佐、優美の眉目忽ちに、當りを拂ふ豪氣の形相、妻手に眼鏡、弓手には、黃金作りの佩劍握り、敵艦來れと海面を睨み付たる眦りは、長板橋上百萬の魏軍を睨らみ返したる張飛も斯やと知れける、互ひに揭ぐる戰鬪旗、距離次第に近けば時分はよしと艦長は、「打かた始めの號令に、白石少佐が打出す、十五珊の速射砲、前部後部の八吋砲、つるべかけたる續け打、敵も應射の二三發我艦前に彈丸落て、逆卷立る水柱、物凄じく見えにける、我精英なる砲彈は、百發百中ワリヤークの、煙突破り艦橋碎き、最後の一彈

爆發し、忽ち起る大火災、周章狼唄八尾島の陰に暫らく遁入し、漸くに火をばしづめしも、船体左りに傾きて、戰ひ得ずと思ひしか、元來し航路へ敗走せり、又コレーツも勇ましく、頻りに打かけ來りしも、砲火の力足らずして、彈丸一ツも我艦に、達きし物はなかりけり、我艦よりは一齋に、ひきもきらざる續け打、惕はじとや思ひけん、ワリヤークの後につき、月尾島に遁入たり、此時瓜生將軍は淺間艦に命令し敵を急に追はしめたり、勝に乘つたる淺間艦全速力にて追擊せり、夫と見るより敵艦は、又遁のびて、列國の艦と艦との其間に潛みかへりて居たりしが我精英の攻擊に遁れがたしと悟りけん、言ひ合せたる如くにて、我と我手に火を放ち、轟然一發ワリヤーク、コレーツと又スンガリー、軸轍を並べて爆沈し、朝鮮海の敵艦は影も止めず殄滅せり、我艦隊は一同に、ごづ

と揚げたる勝鬨に、連て仁川全港に日本帝國萬歳と、祝する聲は山岳に、響き渡れる如くなり、一艦一兵傷づけず、勝を制せし戰略は、瓜生將軍智謀の德、一擧一動沈着に、機に臨んでは果斷なる、八代大佐の勇の德、智將勇將相俟ちて仁川沖の初海戰三德備へし大勝利と末の代迄も稱へけり。

國民教育

新作淨瑠璃

乃木大將誠忠記

渡部松菊齋著作

上の卷　爾靈山下夜營の夢

黄金の山垣と繞れば、老鐵の峰壁と圍み、天の造れる要害は、世に比ひなき旅順の城、時しも霜月末つかた、遼東の野も冬かれて、梢さびしき柳樹房、第三軍司令官、乃木大將の營所の搆へ、修羅の衢の戰場も、萬づ物音しづまりて、あはれを添ぬる夜半の頃、一枝の筆を戈として、軍の場に立か弓、矧川てう名もしるき、志賀重昂氏は只一人、訪らい來る營所の中、志「ヤ山岡參謀殿、志賀でござりますが、閣下はまだ御休に成りませぬか　山「ハア閣下は小官の任務

の電報飜譯の最終の報告を御覽に成る迄は十二時はおろか午前一時二時頃になる迄も御寢なる事は有ませぬ、志ヤそれは恐れ入た御氣根の事てござりますなと聲聞付て大將は大「チヽ志賀君か、サ御はいりなさい、今公用がすんで是から浮世話風流談に入らふとする所だ、志「ヤ閣下此御多端の中に風流談とは、いはゆる英雄の胸中閑日月ありてござりますな、大「イヤ私は一秒時間も胸に閑暇なぞはないが、コレ見給へ此樣に星清く風冷やかな夜營の中に、ビスケットの空鑵を代用したる火鉢を圍んで斯う話して居る處は即はち一幅の画題ではないか、近頃四圍の境界がすべて詩的である風流的で有ではないかノ 志「閣下の仰せの通りで小生も今日第一師團司令部へ伺ひまして歸り路の光景、老鉄山の砲臺へ夕陽が落んとする時一面黃色に染るかと見

れば、我陸軍の攻城砲の響きと共に見る〳〵白く化し、銀世界と成狀態、全然詩的でござりますな、ヤ、夫はさうと御參考に申上ますが、今日關東報の飜譯の拾ひ讀をしますと、アの先月廿日に占領しました、水師營南方高地の壘の中で先き頃小生が拾ひ得て御目に掛ました敵の傳票の主のフロウル中尉が勇戰の事で同中尉は部下九十五名と共に一個の穹窖堡を死を以て固く守り九十五人の內九十二人迄死傷し殘る三人と成るや中尉自から銃を執て日本兵を射擊し其めざましき有樣は味方に鳴渡りてひとしく激賞する所なりとの長文の記事がござりましたと聞も終らず山岡少佐 山「左樣か敵ながらも遙れの行動遺が日本兵の敵とするに足るべき好男兒ぢやノと語るを聞て大將は憮然として歎息し 大「九十五人が三人に討なさる、迄も守れよと命

令下す敵將の心もさこそと思ひやる、我特別に撰拔したる決死隊が廿六日夜襲の時に爰を攻よ彼所を取れ、占めたら死守して動くな、國家の爲に斃れよと、我命令の其下に白襷を十字にあやどり、皆拔刀を振かざし、勇み進んで死に行其健氣さを見るにつけ、ア、我日本のますら雄はいかに雄々しきものなるそ、いかに優しきものなるそと、腸を斷つ思ひにて感謝の辭も知らざりしが、今志賀君のいはるゝ通り、敵も必死の防禦に力め、遂に目的を達し得ず、多くの士卒を失なひしは、返す〳〵も無念至極と、部下の士卒を造次顚沛も、思ひ忘れぬ情こそ、實に大將の心なれ、稍有て山岡參謀、山閣下の御述懷も御尤てござりますが、白襷拔刀隊の壯烈は日本軍人の精華を發揮したる物と萬國の賞する處此破天荒の壯擧が敵の心膽を寒からしめ、士氣を沮喪せしめたる

は偉大の功と考へます、しかし中村指揮官の負傷の經過はどふですかナ、「今日野戰病院へも伺ひましたが、中村閣下の名譽の御負傷は、良好の經過で小生の訪問を非常に喜ばれまして、一首の和歌を示されました、大「ヤ經過よしとは嬉しい、シテ歌といふのは、恵「己が身は、さもあらばあれはかりこそ、ならさりしこそ、恨みなりけり、大「ア、己が身はさもあらばあれ、アゝ同感ぢや、指揮官に此氣慨あり、殊に第七師團の新兵北海健兒も加はりたれば明日の一戰こそ二百三高地を奪取せいではおかれぬワイ、と威氣昂然と傍らに有合ふ紙にすら〳〵と書認むる即吟に、大「斯んな悪詩が出來かけた、兩君見て下さい、恵「ハ、爾靈山險豈難攀男子功名期克難、是は意氣慨然たる御作、いかなる難事も斷行すべし。いか成艱難も耐忍すべしとの。閣下の御氣性言外に溢れ、恐れ

ながら豪氣一到高峯を壓倒すと評し奉りますと申上れば山岡少佐「山」志賀君の評の如く。一氣呵成の御作殊に二〇三高地を爾靈山とは命け得られて妙でございます。小官は振威一喝三日耳聾すと評し奉ると述る詞に大將は「大」ハ、高山を壓倒するの威氣もなく三日聾に成程の大聲にも非ず兩君の評敢て當らずだ「志」閣下轉結は如何遊ばします。「大」ヲ、下の二句かの夫は明日確實に占領して後の事さと。死生を前に控へたる、ものとは見ねぬ其狀態むべ英雄の胸の内おくゆかしくもゆたかなる山岡少佐心付「山」夜も大分更けましたが、各方面共未明より総攻擊の筈なれば、戰線は徹夜でありましやう、閣下には暫く御まどろみ遊しませサ、志賀君歸舍ましやう、「志」閣下御機嫌能御休息遊しませ、「大」ハイ御苦勞と互ひに式禮悠々と宿舍〳〵に歸り行、跡に大將

唯一人、更る夜營の夢の間も、軍慮を帷幕のうちかたぶく、月の光りも彷彿げに怪しく映る人の影、「大」そこに來たは誰か「少」ハイ私でございます「大」私とは「少」保典でございますまだ御寢なりませぬか父上と幽かなる聲は正しく我子の少尉、大將は嚴然と「大」父とは誰の事ぢや、最も予には二人の忰はあるが一人は南山の役に名譽の戰死を遂げ、殘る一人は今第一師團の戰線にあり、國家存亡の分かるゝ今日、暫時なりとも其陣地を離るゝ樣な不心得の子は持ぬ、定めて人違ひであらう、はや歸れ「少」其お叱りも有ふかと存じましたが、保典明日の攻擊戰に名譽の戰死を遂げますから父子今生の別れ御暇乞に參りましたと、近寄る少尉をはつたとにらみ、「大」コラ第三軍司令官乃木希典の陣營へ、誰が許した無禮者といと嚴そかなる一言に少尉は遙かに引退り、恐入たる

風情なり大將尙も聲あらゝげ、大「ナニ暇乞に來た少「ハイ大「コリヤ兄弟共に生きては再び遭ひませぬと誓ふて出陣したでないか明日は大攻擊の計畫しつゝある今夜に臨み、殊に下士卒の師表となるべき將校の身を以て、私情にかられて我陣中へ來る事言語同斷の奴ぢや、コレよう聞け、予が麾下たる三個師團十萬の兵士、一人として親のない者があらうか、皆これ父母の愛兒である、中にも豫備後備兵なゞは、家に妻もあり子もあり、又は一家の柱にて、父母妻子を一身で養なふ者も多からふ、すべての私情をかへり見ず、一意君國の爲に犧牲となり、屍をさらして戰死する、其遺族等の悲慘は如何樣であらふか、察するに餘りあれ共、國家の安危にはかへられぬ、斯程の事が解らぬかと事をわけ理を分けて、くゝむる如き敎訓に、少尉逸々肝に銘し、少「ハイよく解りま

したと遽かに姿勢を改めて少「軍司令官閣下、步兵少尉乃木保典が一言申上度事がございます、小官は後備第一旅團長友安少將の命令の下に、明日は戰線の第一に立ち、名譽の戰死を遂ますから御安心を願ひます、唯閣下が御やつれ遊ばされたお顏を拜し、永々の御苦心嘸かしと察し上奉ります、君國の御爲御自愛を願ひます、閣下御免と一禮して出かゝる大「ア、コリヤ保典少「ハ、父上大「兄にまけぬよう立派に死ね少「ハイ大「他人に笑はるゝ樣な死態すな少「ハイ大「ゆけと一言が、親子一世のうき別れ、外には詞なきすてゝ、勇み立てぞ出て行、跡見送りて大將は默然として居たりける

處はいづこ白妙の、雲の白棉かけまくも、あやにかしこき高樓の御夢に入りて長しへに、護國の神と稱へらる、阪本龍馬の幽靈な

り急ぎ候程に、早旅順近く着て候、抑も十年の昔遼東の野の露と消ゆ、渤海灣の藻屑と失せし、我日の本のますら雄の、亡魂に代り、第三軍司令官、乃木將軍を慰さめんと、暫らく昔の姿にかへり冥府よりはる〳〵と此柳樹房の陣營へ、漸やく尋ね着て候」黑潮の名には馴染まぬ武士の、誠溢るゝ血の色の赤き珊瑚の玉きはる、土佐の海原三千里、雲井を翔る阪本龍馬、白地の衣服に襠高袴、朱鞘の大小横たへて、六尺ゆかたの立派の骨から、悠々と打通れば、大將はいぶかしげに「乃木希典の陣營へ、案内もなく御慰問とは、何れの方に在するや」と不審の詞に客人は「世界に名高き乃木將軍傾慕一日の故にあらざれ共、幽明處を隔つる故、今日始めて尊顏に謁する事、祝着至極に存じ奉る、某は明治維新の始め、幕吏の爲に横死を遂げし、土佐高知の舊藩臣、阪本龍馬の亡靈

にて候」「ヤ、スリヤ本年二月六日しかも日露交際破れたる其夜、葉山御用邸に行啓中に渡らせ給ひし、皇后陛下の御夢に入、日露戰爭の未然を察し、大勝利の豫言を奏し上げ、大御心を慰め奉られし贈正四位阪本龍馬先生にて在せしかサ先是へ」と席を薦めて恭〳〵しく謙退辭讓の賓主の禮稍あつて阪本龍馬「露國が東洋に於ける陸海軍の策源地として多大の費用と勞力とを其防禦設置に注ぎ堅牢不拔の要害たる旅順攻擊軍司令官に任ぜられ御苦心の程察し奉る今冥府に在る山地獨服龍將軍は日清戰役の當時第一師團長として當方面の司令官として閣下とは因緣淺からず拙者も同藩士のよしみあり且は該役に於て遼東の野に屍を曝らし血を流して購ひ得たる占領地も程なく他國の有と成り十ケ年の間恨をのんで地下に目を瞑り得ざりし海

陸軍數萬人の戰死者に代り閣下が永々御苦心の萬一を慰さめ申さん爲態々來着致せし次第、川上田村の兩將及び以前は垣にせめぎしも、今や一蓮托生の西郷桐野篠原等の諸士よりも冥府遙かに御同情を表し居れば是又傳達仕る」と懇懃に相述る大將感激斜めならず「有り難き御懇命生ては維新の偉業を贊け、死ては帝國守護の神と仰がるゝ阪本龍馬先生冥府より遙々と御慰問を賜はる事希典面目此上や候べき斯く幸榮ある機會を理して幾回か死を決して死處を得ざる武運拙なき希典が述懷を一通り御聞下され」と席を改め威儀を整し「扨も明治十年西南の役に際し歩兵第十四聯隊長として熊本鎭臺應援の勅命畏み奉り、三大隊を引具して熊本城に率ゐ入れ我は一先引返し、殘んの兵を驅け集め、再び向ふ銀杏城「ホ、我も其日の戰況

は、冥府に在りて西郷より、委しく聞し思ひ出を、語り合ふも又一興、時に二月廿六日、篠原桐野の兩隊は熊本城を取圍み、村田新八の率ゐる一隊、早くも植木の方面にて、北軍南下の道を立切り、邀へ討んの戰略なり、「勝ば官軍「負れは賊徒「敵も味方も九州男兒「薩摩隼人の速り雄と「小倉健兒のますら男と忽ちこゝに衝突し、奮激惡戰凄まじく、無二無三に進み入り、端なく植木を占領せり如月空の暮かゝり、降り來る雪に目もあかす、霰たばしる小手の上、膚を剪ざく寒風も、ひるます去らずまくり立、進行つづくる其折から「チ、其時に薩州軍は向坂の森の中より打出す彈丸諸共に、一團の拔刀隊、一度にどつと攻來れば「チ、こなたも得たりと應戰し、一時は敵を追ひ退けしも、味方は僅かに三中隊、敵は新手の兵加はり、衆寡敵せず我軍は戰ひ不利と見たる

より死を以ても守護すべきは聯隊旗なりと旗手河原林少尉が肌に卷付けさせ、堅く守護を命じ置き、我は其右翼なる、鉈塚の、吉松大隊長に傳令せんと、暫らく陣地を離れし跡、河原林は只一人奮然として敵陣へ、かけ入たりと聞よりも、チエ、誤まつたり殘念至極、若軍旗を失なはゞ、今更何の面目ありて、歸りて諸將に見えんや、返戰して奪返さん、我につゞいて來れや」といひさま馬に鞭打て、陣頭にかけ出す、日は暮はて〻遠近に敵兵の焚く篝火に映る高地の前面に屍の山を築上たり、時に居合す松村曹長樣木軍曹諸共に、左右の轡に取縋り、斯く亂軍の中へ切込むは求めて死地に入る同前聯隊長の死處に非ず、と涙を揮つて諫むる故、敗餘の兵を收めつ〻、一ト先木の葉へ退きしが、如何にも遺憾やる方なく、我馬既に斃れたれば、吉松少佐の馬に跨がり、獅子奮迅

の勢ひにて、敵前近く乘り出す處、彈丸來りて馬に中り、前足折て斃るゝはづみ、我も大地にどうと落「大無念ながらも立上り、寺澤山へ達せし時、吉松少佐も戰死と聞、又玉名村に討て出、激戰中に我も負傷、是非なく久留米病院にて療養する事十餘日、寢ても覺ても忘られぬ、軍旗を敵に奪はれしは、我終生の恨事なり、取返さで止むべきと、窃かに病院を脫走し戰爭中に又負傷、舁に乘りて指揮を採り、骨を碎いて戰ひしも、遂に軍旗は敵手に留まり、取り返すべき術もなく「大ア、希典不肖と雖も武士の家に生れ、武士道を以て養はれし身、此上の恥有るべきか、腹かつさばき死んものと、幾回刀を取上けしも、戰友部下に止められて惜しからぬ命存らへしも、御仁慈深き皇君は却て功を賞せられ、又改めて聯隊旗を下し賜はる御仁愛、益々恐懼身に加はり一旦國家事有る日

は一身を抛つて、天恩に報ひ奉らんと、うき年月を送りし内、日清の役に當り、第一旅團長の職を辱ふし、出征の命を承はり、これ希典か死すべき處、死すべき時の至れりと、密かに悅ひ出軍し、金州旅順の攻擊より蓋平城太平山田庄台と轉戰し、皇上陛下の御稜威と將卒の武勇により、戰ふ毎の捷軍幸か不幸か希典は又此役にも死機を得ず、御寵眷の加はるたびに其責益々重ふ成り、斯く不忠の希典を陸軍大將の重任に補せられ、這回の戰爭には第三軍の司令官、ア、回顧すれば十年前、山地閣下の軍配にて一日一夜に攻落したる此旅順を、抑も包圍の始めより總攻擊四回の今日迄、三ケ月餘の日を重ね無慮五萬の士卒を失ない上下に對し面目なき、希典の武運の拙なさ御推察下されよと」三十年來腸に刻みつけたる思ひ出を、始めてもらす物語り、さすが豪氣の坂

本も將軍の心情を察しやられてしばらくは、默然として居たりしが、「閣下が謙遜の意より斯く述らるゝも理りながら我友山地將軍が、攻擊したる時に比すれば、軍器の進步戰術の發展難攻不落の天險に露國の國庫の半ばを傾け、文明式の防禦の備へ、世餘座の砲臺に、大數五千の大小砲門、幾千哩の鐵條網船渠兵營總督府の建築、大連營口ハルビンの三方面の鐵道連絡、斯く完全なる永久築城に五萬の大軍必死の防備、十年前の比にあらず、世界歷史ありて以來、其規模の大なる事は、セバストホールにまさり、又閣下の壯烈なる攻城は當年のペリシール將軍にも遙かに卓絕し居らるゝは、各國の知處、又數萬の同胞を失ふたりと歎かるるも、勇士の君國に殉じたる者にて、閣下獨りの責に歸すべきものにあらねば左まで御心慮惱ませられな、某ひそかに通力を以

て敵の前途を察するに今旅順に二萬の兵あるも負傷者病者半を超え、彈藥糧食既に竭き嚢中の鼠釜中の魚、十數日を出でずして、閣下の軍門に降參し、開城を申來るべし、バルチック艦隊は先月廿六日の夜、クロンスタットを發せしも、來月中旬に至らざれば喜望峰にも達し得まじ、多くはマダマスカル邊で年を越え、春過ならでは來るまじ、よし此方面は東洋のネルソンと稱はらるゝ東郷大將の軍略の下に頓て殄滅せん事必定なり、終に臨んで阪本が、殊に御同情に堪えぬのは、天にも地にもかけがへなき令息御兄弟共に御戰死の事、いかに君國の御爲とは申ながら、白銀にも黃金にも、玉にもまさりていとしてう、其子寶を二人まで遼東の野に拋ちて、顧み給はぬ誠忠は、いかで鬼神も泣ざらん 阪「閣下は豫て御覺悟ならんも、御留守を護る奥方の御痛はしさが察し

やられ、子を持ぬ予も骨身にこたへ、始めて涙を覺えてござると、餘所目も思はずどふどふし、男泣にぞ泣ける、大將感に打れながら、聊か不審の面持にて 乃「御同情辱し、兩人の忰の內兄勝典は南山の戰に斃れ、弟の保典は今第一師團の營中に在り、先刻爰へ參りし故、呵り懲して歸せし所、二人か戰死と申さるゝは 阪「未然を察する閣下なれ共、精靈の通神は知らせられぬも理はり、御次男の少尉殿には、友安將軍の命令の下二百三高地攻擊傳令使となり、彈丸雨注の中をかけ回り、逸々使命を傳ふる狀態、ヤ此親にして此子ありと、激賞せらるゝ其折から、益々敵彈雨下來り二百三高地下の攻路頭に名譽の戰死を遂げられたり」 といふに大將席を進め、大「スリヤ眞實忰は戰死しましたか 阪「ヲ、最期の立派さ勇ましさ、某確かに見屆たり 大「ア、有難や辱なやヲ、出か

した保典、夫でこそ我が子ぢや、兄といひ汝といひ、潔よう戰死した、部下幾萬の戰死者の父兄へせめての言ひ譯ぢや、チヽよく死んだ」といふ聲にお召と心得入來る從卒「閣下何か御命令でござりましたか、」「イヤ別に呼んだぢやない、ムヽ、扨は夢であつたか」とあたりを見ればコヲいかに、今迄在し阪本が、姿も見ゐず朦朧と長官室の一面を照らす燈火ばかりなり、はや明渡る東雲の空に殘んの星影も淡く消行朝まだき、伊地知參謀長首とし、幕僚の諸將校皆陳營に馳集る、折しも參謀白井大佐物思はしげに入來り「今朝は未明より各方面一齊に進擊激戰酣はなる景況でござります」「サヽ、今日こそは二百三高地も全然奪取するであらふ」「ハ閣下誠に遺憾なる報告を申上ねばならぬ場合に逢着しました」「ハア何かの」「只今伊豆參謀より電話に、乃木少

尉殿が名譽の御戰死との事でござります」と、跡いひさして參謀は、顏も得上ずさしうつむく、大將動ずるけしきもなく、乃「ハハさうかヤ滿足したと唯一言が千鈞の鼎の重みに壓るゝ思ひ並居る一同將軍の御心根を察し入、水を打たる如くなり、櫛の齒をひく報告に、又もかけ來る傳令使、「閣下我全軍の猛擊に有繋の敵兵も到底維持しがたきを悟りましたか、敵軍全隊狼狽出し稍ざよめいて參りましたと言ひ捨てこそ引返す、大將は勇み立ち愉快ぢやドレ實見しやうと、命令一聲一同が、早乘出す勇みの駒、小高き丘に蹄を止め彼方をきつと見渡せば、全軍山に充滿て蟻の塔に異ならず、五晝六夜の戰ひ續け、敵と味方の屍が積重なりて、堆く二兒形なす谷合の、平らぐ迄に埋め立たり、勇敢無双の敵兵も我精兵の猛擊に、遂にや敵し得ざりけん、一度にどつと退却す、

我軍透さず突進し海拔二百三高地に旭の御旗をひるがへせば、全軍一同萬歲と叫つと揚たる勝鬨は渤海灣の浪も沸き、黃金山も老鉄も、一度に解る如くなり、乃木大將は欣然と、乃「霄に作りかけたる、詩の轉結二句は斯ふもあらふか鉄血覆山々形改萬人齊仰爾靈山、これ〻末世に譽れある、其偉勳は天さかる、鄙の伏屋の乙女等が頭にいたゝく髮にまで、結ひ傳へまた言ひ傳ふ。名高き二百三高地と萬世までも仰ぐらん。

國民教育

新作淨瑠璃

渡部松菊齋著作

軍神廣瀨中佐

第二回旅順閉塞

夫れ爛漫たる櫻花。色香絕にして朝日に輝き。又時來れば潔よく。散る雄々さは敷島の。日本魂に擬らへし。其言の葉の偲ばるゝ。頃しも如月末つかた。七十七士の決死隊旅順の口を閉塞し。敵の航路を狹めしが。はやりにはやる益ら雄は再び港を塞きつめ。勝を一擧に制せんと威氣天を衝く勇氣の將卒。福井米山千代彌彥。八重の汐路や九重の御稜威を頭へに推戴き。港を埋むる石よりも。重き任務を載せ將つて援護の驅逐水雷艇。廿餘隻の艦隊は軸轤

を卿みて整列せり。爰に軍人の亀鑑と唄はれ武名轟く廣瀬中佐福井丸の甲板に威儀儼然と顯れ出「栗田機關長待に待たる時間も稍やく近附て來たが閉塞船の出發前に一同に言ふ事が有から、呼んで下さい、「コリヤ一同集まれ、只今司令官殿より訓示か有から整列して謹聽せよ「我親愛なる隊員一同今度は第二回の閉塞である、閉塞とは讀んで字の如く旅順の港口を塞ぎ詰むるのである。此事はスペインとアメリカて戰爭の時行ふたのが初めであつて、其時は只九人の決死者を得、之れに將校一名加はりて漸々拾人の決死隊がサンチアーゴの港口にて、沈沒を企てた、時にスペインの司令長官、セルブイラ將軍は、之を見て、アゝ敵ながらも適れ勇士である、此の如く忠義の士を殺すに忍びずといふて、其砲擊を中止した、此事は一ッの美譚として傳へられ

た、其以來曾て無ッた。處ろで今度我に於て行はんとするや、外國では僅かに九人の決死隊を得てさへ、歷史上の美譚とせられた決死隊が、我日本に於ては自から進んで願ひ出た者が二千人の多きに上つた、乃で我東鄕司令長官閣下は、此出願人の姓名を逸逸見て、將校は暫らく措て、軍隊の規律に服從してから、未た幾月も立ぬ四等卒迄が、一身を拋つて、殆んど空前にして、しかも、必死といふべき此事に、我も〳〵と進んで願ひ出るとは、我日本の軍人は、何といふ健氣な臣民であらふと、熱き涙をもつて汝等の出願を迎へられたのである、何分多數の事じやから、其撰拔に苦しんだ程た、首め第一回には七十七人を要し、今度は指揮官と機關長は、前の者を再び用ひられ、其外は皆新志願者を採用せられたのは、折角健氣なる出願を空しうせぬといふ主意である、此事は

世界各國の歴史上にも未だ曾て見ざる程の最も名譽ある事業あるかはりに、最も重き責任を有し、最も危險を冒さんければならぬ、といふのは、斯く武裝もして居らぬ普通の瀛船を以つて彈丸を冒して敵の港口に入り込み、彼の恐るべき、火藥に態と火を点て爆發させ、又自分の乘て居るところの船を我と我手で沈むるという、實に危險の仕事である、殊に今回は一層の注意を要するのは、第一回の時は敵の油斷して居る處ろへ、天祐の濃霧に乘じて突然と進行したので彼等は一向心付ず我閉塞船の沈むのを見誤りて、己等が敷設し置きたる水雷に觸れたぢやと思ひ、日本軍に始めて勝た、軍艦五隻を打沈めた抔と、本國へ報告をなした、後で能く聞けば、先に沈めたと思ふた船は何ぞはからん己れの港口を塞がれたのじやというので、はじめて狼狽したといふ

時に觀劇將軍と字せられたスタルク提督は本國へ引戻され今度は世界で三人と指を折らるゝ、マカロフ中將が司令長官と成つたのちや、斯人は有名なる海軍戰術論を著はし世界に多くの貢献を拂はれ又十五歳の時より太平洋艦隊に乘込み海上生活の經驗によりて東洋の事には實に委しく殊に日本海の潮流に就て、非常に綿密の調べをなし、此處は防ぐに利あり彼所は戰ふに益ありと其活動區域を研究しよと云ふ、處ろで露國は毎々の前敗に懲り、東洋艦隊の提督は此人ならで外なしと、撰拔せられたのである、マカロフ其人も大責任を負て來られたのだ、一同思へ、本月十日驅逐艦が、舷々相摩する程の激戰に徴しても一旦沮喪したる志氣を奮ひ起さしめたる事を察するに余りあるじやアないか、即ち是が今度は一層注意を要する處ろじや、デ此事を

成効するには全隊一致して此船と共に沈むといふ心と覺悟があければならぬ汝等よく記臆せよ、畏くも　大元帥陛下が朕は汝有衆の忠實勇武なるに依賴すると詔らせ給ひしを軍人の本分としては此に報ひ奉るは血と涙と生命の三ツである、此有難き詔の下に、戰へよ、討れよ、死ねよ、擊れても死んでも、目的の場所へ進み入り、閉塞の効をあげ敵艦を港の中へ封じ込で仕舞て一面には陸兵及び兵器彈藥糧食等を密かに運送して陸軍の活動に資せんければならぬ、我勇敢なる陸軍が恙なく上陸し果せるならば前途我日本の大勝利なる事は火を見るよりも明らかじや依て此の閉塞の成効如何は我帝國陸海軍の勝敗安危の分るゝ處であるから若不幸にして此船が航行の自由を失ふたる時には一同互に抱き合ふて目的の場所へ泳ぎ着き此屍を以て人

柱と成してなりとも、誓て港口を封鎖し、軍人の責任を全ふし、日本魂の眞價を世界に發揚するのぢや、一同其決心を以て、國家の爲陛下の御爲め場合によりては乃公と一ッしよに斃れてくれツと理非明白に言ひ諭す全隊勇氣ふるいたら決死の臍を堅めけり、中佐杉野を近く召され「爆烈藥發火の事說明の事はどうじやのう「ハ、御命令の通り委しき圖面と共に一目して分り安く何人にも成しとげらるゝやう致して米山千代彌彦共に船艙室の壁に張付け其掛りの者へ彼の實物に就て御申付け通りの說明を與へて參りました「ヨシ〳〵夫で愈々安心じや第一回の時報國丸は敵彈の爲め電氣纜を切られ發火せんで閉口したが今度はたとへ電氣づなを切られても大丈夫發火する爆發が閉塞事業の要件ぢやからのう夫に伴ふて之に点火するのが

危險中の最大危險の仕事じやからのう、と話しの内に平野一郎進み出、「指揮官ごの、甚だ差出がましう御座いますが、只今杉野兵曹長殿の御話し中に、爆發物へ口火をさすのが大危險の任務ぢやと伺ひましたが、是は私に仰付られ度ムり升」「上官私は高千穗艦で無學の命知ずとあだ名を取て居る小池幸三郎であります私は學問がないから其代り命を的に火の中へも飛込ます で此任務は是非私へ仰付け下さりませ」「中佐殿八雲艦の小林吉太郎です命を的に働くは皆同樣で私も決して人には讓りませぬから是は私へ願ひます」「指揮官殿伊畑小次郎であります我龍田艦からは私が只一人撰み出されたのでありますから同じ志願者の戰友に俺が何でも一番六ケしい仕事をして皆の分迄働くと誓つて來ましたから是非私へ願ひ度ムります」「ア、

コレ君等僕が第一番に願ふて居る處へさう後から〳〵と願ひ出て防害しては困るぢやないか」「ソレハ君さうはいかぬ僕は此隊中一番の年若で一本立のからだだから恁ふ云時にかけ出すのが少年者の責任だ」「上官ごふぞ私へ」「指揮官ごの是非私へ」「中佐殿何でも搆わず私へと互ひにまけじ劣らじと死を爭へる健氣さに孰れをか拾いつれを取らんとわかちかねてぞ見えにけるかくては果じと聲勵まし「コリヤ皆騷しいぞ本官の詞も出さぬ内に立騷いで何事ぢやコリヤいか成場合にも禮儀を亂しては成らぬぞといふて敢てしかるではあい互ひに死を賭して先を爭ふ其氣性は實にたのもしい是がいわゆる日本魂世界に誇りとする處ぢやア、斯勇ましい部下を率るて之れが指揮官の任に當るのは本官の最も悅ぶ處ぢやが爰を能く聞わ

けよ成程爆烈藥の点火は重大の責任ではあるが一人で足る事ちやから到底一同の願を容れて皆に滿足を與ん事は出來んのだ何れの任務も齎しく國家の爲である依て今本官が命ずるから自由に立騒く事はならぬぞと姿勢を整し嚴そかに「飯牟禮仲之進、菅波政治舵の操方、中條政雄、小林吉太郎錨揚卸し方、坂井主計、石井左市端艇の捲卸し方、松下軍吉、小池幸三郎、防禦物の造營方諸部の整理方、楠鉄三、平野一郎厨房掛、機關部は平野松三郎塚本達郎、山本半次、井畑小次郎、沓澤皆造斯く豫じめ定むるけれ共非番の者は相互ひに助け合ふて同心一致の精神を以て目的を達する事を期せよ「エ、爆烈物点火の事は杉野兵曹長に賴む「スリア此大任務を私へハ、有難うございますと勇み悦ぶ其風情中佐重ねて一同に向ひ「皆か斯勇ましき擧動に付て尚

一言注意を與ふるの必要を感じた今回目的の任務は旅順港口を塞き詰め敵艦を封じ込て仕舞ふので有て前途望みある勇士を殺さうという爲ではないのぢやから根本の目的を忘れ一時の功名心に驅られて死を急ぐといふ樣な事が有てはならぬ決死とは事を成し遂る上に就て最後の覺悟をいふので敢て死を輕んぜよといふではない軍人の身体は君國へ捧けた物ぢやから一面には鴻毛よりも輕んじ他面には自分から大切に保護せんければならぬ是は一己人の私情の爲ではない國家の爲にいふのぢや昔は一將功成りて万卒枯る抔いふたか今は然ず一兵卒と雖もひとしく　陛下の御股肱であるぞ汝等聞ずや第一回閉塞の時林紋平が血を以て認めたる願書の如きは畏きあたりの御手に觸れさせられたりと承る殊に死傷者ある度毎に大御

心を腦まし奉るは畏れ多い事である又國民全体に於ても出征軍人の死傷者ある報を聞毎に五千萬同胞がいかに精神を傷むるかしらぬデあるから各々注意して自分の身体を大切にするのも君國に對する一ツの奉公であるといふ觀念がなければならぬゞと仁愛渥き中佐の諭し聞居る部下の一同は只感涙に咽びけり「御訓示の趣は一同身にしみ渡りて誓つて忘れませぬ」「チ、能うわかつて滿足ちやヤまだ少し時間もあるから小休憩をやらう、コリヤ是が最後の休憩であらうから上も下もなく一同打くつろいて話さうてはないか」「中佐殿へお願がありますか御作の正氣の歌は軍人の教訓と成るべき金言と存じますが皆各艦より撰抜されて寄り集りの隊員でありますのでまだ伺わぬものが有ますから此處で御讀聞が願ひ度です」「ア、易

い事ぢや一同よ是は第二回の指揮官を命ぜられたに付て感じた事が有て戰友の石田機關長へ書て贈らうとしたが紙がなかつたから持合せのハンカチーフへ書て送つた詩ぢやが是が乃公の精神ぢやから聞てくれ死生命に在り論するに足らず鞠躬唯應に至尊に酬ゆべし奮躍難に赴て死も辭せず從容義に就く日本魂一世の義烈赤穗里三代の忠勇楠氏の門憂憤身を投ず薩摩の海慷慨刑に就く小塚原或ひは芳野廟前の壁と成り遺烈千年鏃痕に見す或ひは菅家築紫の月と爲詞忠愛を存して寃を知らす」「甚だ恐入ますが夫からを御朗吟で願度と申ます」「ムヽヨシ見る可し正氣乾坤に滿ち一氣磅礴として千古に存るを嗚呼正氣畢竟誠字に在り呶々何そ必ず多言を要せんや誠ある哉誠なる哉斃れて已ず七たび人間に生れて國恩に報いん」「一同

感慨にむせびました「チ、同情を表してくれて滿足ぢやヤ愈々時間が來たアレ出發の信號ぢや、錨り拔け鶴の一聲決死の將卒隊伍を亂さず勇み立銘々任務に從ひて米山彌彦千代丸に後れはせじと我れ先に逆卷怒濤を蹴破りて旅順をさして進み行時しも彌生の末近き廿六日夜半の頃浮世の人は子の刻や丑の刻をもうしとせず早二哩に近けば港を守る敵艦隊もしや夜討もあらんかとばつと照せる探海燈光りの影に顯はれし廿餘隻の艦隊は軸轤を交へて押寄る夫と見るより敵艦はあわてふさめき騷ぎ立打出す彈丸雨霰天地に轟き波躍り殺氣も滿ちて物すごし廣瀬中佐はかひ〳〵しく部下の士卒を勵まして「アレあれを見よ千代丸は豫定の場所へ進み入り最早錨を卸せしぞ「千代丸の左側をズット先へ進めとり揖一ばい全速力突進と

砲火の中を事共せず難なく持場に進み入り「ヨシ好位置に達した錨り入れとの號令に錨卸して停めけり「サア〳〵銘々負擔の任務にかゝれ沈沒準備「中佐殿「チ杉野兵曹長か「ハイ私は是より直ぐに任務に取掛ります「ア、コレ杉野待てくれ周章る事はないから沈着の態度でやつてくれソシテ点火した直に爰に引上げ來てくれ待つて居るから「指揮官の御命令でありますが衆人の中から私へ特別に御命し下された大任務で萬一にも口火の消る樣ナ事が有ては成りませぬから爆發する迄其場に付て居つて其責任を全ふする決心でありますそんな事云てはならぬ夫じやから今度は爆發の方法に非常に苦心して据置方を研究したのじや点火さへすれば爆發するに極つて居るから点火さへ終つたら直に引上て來て出來得る限

り生命を全うせんければならぬ「ハ、有難う厶り升が此孫七は十年以前威海衛攻撃に防材取除けの任務の時死すべき命でありましたをお助け下さりましたので孫七の今日有は中佐殿の賜ものでありますのみならず十年間一日の如く何くれとなくおいたわり下さりまして御恩の報じ様が厶りませぬが御命令で厶りますから点火したら直引上げて參りますから私にはお構ひなく端艇へ早くお移り下さりませ此處でお待は御斷申ますきつとお次から參ります上官貴下こそ國家の御爲で厶りますから御尊体御自愛を願ひます上官御免と言ひ捨て船底深く勇み行後見送りて廣瀬中佐是がもしくは今生の別れなるかとやゝしばし打見やり居たりける折から敵の哨艇より發射の魚形水雷は水線下部に命中し今や沈まん其有様斯くと見るよ

り廣瀬中佐「杉野が点火の成効にしては些早いが今の敵彈の爲め爆發したのか何にせよ沈没の目的は達したのだ一同祝せ「日本海軍萬歳閉塞船萬歳福井丸萬歳「よしサア〳〵任務の了りたる者から先へ端艇へ乗移れコリヤ別に慌てるなどふじや人員に不足はないか「杉野兵曹長と伊畑機關兵が見えませぬ「ナニ杉野と井畑が見ぬスリヤ捨置れぬと又も福井に乗り移り杉野井畑はいつくにと船体隈なく捜せ共其影さへも見えされば再度端艇へ引返し「どふじや〳〵二人はもう來たか「井畑は今見ぬました「杉野はまだかいか〳〵はせしと氣をいらち又乗り入らん其有様一同は袖を控え「アヽモシ指揮官殿只一人の兵員の爲に御身におけがが有ては成りませぬ最う危險で厶りますぞ「危險は俺も知つちよるがたとへ一人と雖も同心

一致の戰友を保護するのじや畏こくも　陛下に對し奉り無二の忠臣の安否をも確めず打捨て歸るは指揮官の任務を爲さぬのぢや　「夫でも最う危險でムります上官の御身が大事でムります左程お心掛りならば私共が參つてさがして參りませう

「コリヤお前達をやつてまだ此上に苦しますのか　「左樣ならば御斷念下さりませと右と左りに取付て諫め止むる有樣はむらがるひなが親鳥の諸羽にすがる如くなり中佐は涙を振ひつつ　「皆の厚意は實に嬉しい其眞心は深く感謝するが併し指揮官としての俺の任務をごふか盡さしてくれと止る袖を振切振切三度福井に乘移れば全隊ひとしく聲を上げ　「中佐殿いよいよ危險でムりますぞ最早水面三尺迄沈みました　「ナニ大丈夫だ皆が夫程迄に思ふてくれる至誠の感應によりても廣瀬武夫

は死なぬぞナーニ敵彈が日本男兒に中るものかと焔々たる煙の中爰に現はれ彼所に立早傾ける甲板を飛鳥の如くかけ回はり　「杉野〳〵最うよいから上つて來てくれ杉野〳〵事は成功した杉野早ふ上つて來んか待つて居るぞ杉野孫七と呼べど叫べど其甲斐も答ふる物は甲板の上までひたすあら波の音より外にあかりける中佐は獨り忙然と　「スリヤ已れの任務を重んじ爆烈物の發する迄其場を去らず守り居り職務の爲に斃れたか不憫のものやとばかりにて悲歎の涙にくれけるが　「ア、此上は是非に及ばず遺憾ながら最うこれまでと身を跳らして端艇へ飛のり　「サア漕出せコリヤ負傷者に注意してやれ俺は皆の彈丸除けに成つてやるぞと諸手をひろげて部下を掩ひ矢表に突立上り櫓拍子整へて勇ましく三段計り乘出す折から飛來

る巨砲の彈丸神色自若の中佐が姿忽ち血煙り水けふり只一片の肉塊を此世の筐と遺し置き七生不滅の魂魄は漫々たる渤海の千尋の底に留めけり全艦隊は一同に古今無双の英雄をかなしむ聲と閉塞の成効祝す萬歳の聲とは和して遙かなる雲井の上にや響くらん

國民教育

新淨瑠璃

軍神橘中佐

渡部松菊齋作

首山堡奮鬪忠烈戰死の段

君と國との二道に命を捨て益良雄が立てし勳功は長へに千世八千代語り傳へ言ひつぎてゆめ忘れなと　皇君の玉の御聲ぞ畏こける、世は明らけく治れる三十七年の秋半ば我皇軍は滿州の遼東の野に進み入雨あがりの空高く首山堡の山の端の弓張月の影冴へて千草にすだく虫の音も澄渡りたる夜半の比天幕一重を城として大隊長橘中佐、地區要害の圖を押ひろげ軍慮に餘念なかりけり、哨兵の當番交代り、チヽ城野君時間だから交代

する夫れは御苦勞時に水島君大隊長殿の御勉强には恐れ入る
な明日は總攻擊らしいに、まだお休みも成されずに地圖を調べ
て御產るよ、さうか我々は時間が來れば交代して休みもするが
大隊長殿の御休憩に成たのを此比は見た事がない我々には時
間が來れば搆はすに先きに寢ろとお仰つて部下をいたわつて
下さる事はまるで親が子を愛する樣だナ、さうさ實に有難いノ
しかし又戰線へ出て號令をかけらるゝ時は、身にしみ渡るな、大
隊長殿の號令は神の御託の樣に耳に響くから働かずには居ら
れぬあゝいふ隊長の號令の下には塹壕も鹿柴も何にもない、死
でも少しも恨みはないノ、互ひに話の折からに內田軍曹入來り
歩哨、大隊長殿はまだ御休みにならぬ樣ぢやの、いひつゝ天幕の
內に入り、大隊長殿まだ御休に成ませんか御氣根で御座ります

なヲ、內田軍曹恰どよい處逢いたいと思ふて居たのぢや、俺は
今まで此地圖によりて種々作戰の道を考へて見たがコレ此一
角と、彼の左の端の一番高い壘が見へるぢやろう、アレを取るは
どふしても鉄條網を迂回して塹壕狼穽をのり越て行なければ
ならぬノ、左樣あれへ行には幾段かの崖を攀登らんければなり
ませぬナ、サさうすると我軍は地形から言へば非常の不利で事
によると强襲法では手に了へぬかもしらぬが、併し內田此一角
が遼陽の運命ぢや、いはゞ土手の劃る可き場所だ、我軍が大洪水
の勢ひを以て亂入すべき口は爰に限るのぢやノ、成程左樣デ明
日は是非此一角を初つぱじめに陷さんければなりませぬナ、固
よりさうだダカ內田隨分是は冒險の仕事ぢやの有名のセダン
の戰爭でも普軍は佛軍の二陪して居たから勝算は既に立つて

居さ、又オートルローの大戰も英獨二國の聯合軍を以て一人の那翁に當つたのである、我日本の三籠城という楠の千早、奥平の長篠、別所の三木、北條も武田も秀吉も皆優勢を以て當つたが、攻あぐんだからノ何にせよ攻る方に防ぐ方より二倍以上の勢がなければ勝を制しがたい事は昔からの歴史が證明して居る、明日は其反比例で行のぢやから一番大奮發で掛られなければならぬぞ、乃でごうぢやらう我大隊は君國の爲、塲合によりては殪れてくれる決心か有うか、㊀大隊長殿夫は無論であります、全隊が豫備に成つて居るのをまだるしがつて、髀肉の歎に堪へぬ有樣で明日は多分總攻撃だと聞て皆腕をさすりて悦んで命令の下るのを待兼て居ります ㊁「さうか皆明日を樂んで居るヤ斯んな勇しい氣象は我日本軍人の特性ぢやノ、ア夫聞て安心した、ど

口には言へど心の中、遼陽の戰ひは、彼我運命の決する處我一身を君の爲捨つべき時の到れりと決死の覺悟人知らず ㊁「アヽ誰か馬丁を呼んでくれ伊藤を呼でくれチヽ金次郎アノおまへは月鹿毛を張り過る位ひに喰はしてやつてくれ、明日は拂曉から爰を進軍して向ふの山の下へ突喊するから突喊の聲か喪ひて炮聲が絶たらは即ち我軍の大勝利ぢや其時は貴樣は直ちに馬を曳て駈付てくれ、俺は直ちに追撃にかゝらなければならぬから金次郎よいか ㊂「ハイ畏まりましたと行んとするを引とゞめ ㊁「アヽコレ待て〳〵 ㊂未だ言事があるのだ今いふた突喊の聲が盛んに起つても鐵砲の音か熄す若くはいよ〳〵砲聲が烈しく成つた塲合は我突喊の効をなさず愈々苦戰に陷つた譯だから俺が子供より可愛がつた月鹿毛も最う俺には用はないのぢや

其時は貴様一人で駈付て來てくれと聞て伊藤は不審顔　金「旦那様ソリヤ何故でござります　大「其場合は俺は十中の八九は戰死するから俺の死骸の收容に來てくれというのぢや、金次郎打驚き　金「旦那様ソリヤ何故で何でそんな忌はしい事を仰ります　大「ハ、、、軍人が戰場に於て戰死するのは何も不思議はない、何が忌はしい事ぢや、ヤしかしそんな事も有まいけれど万一の時の事をいふたのぢや、ヤ序に貴様に言て置くが今日の後悔をいつ迄も續けて此の軍が濟んだなら斷然元の學生になれ貴様の常識もあり多少文筆もありて、決して再び放蕩するなよ、親が嘸心配して居るぢやらう、俺も肥前の千々石に未だ兩親共に健康で居られるが幾つに成ても子は案じらるゝものだそうぢや、アゝこういう因縁か俺の處へ來て一年も立たぬのに俺を慕ふて

忠實に働いて吳るから俺は普代の郎等の様に思ふて貴様をふびんに思ふのぢやと溢るゝ計りの慈愛の詞、金次郎は涙をかくし　金「從軍以來屢の御教訓充分分りました、私も必ず何かやります、長くて十年の内には、伊藤金次郎の名を社會へ顯す事を誓ひます、時に一つお願ひがございますが、明日私をも戰線へ御連れ成されて下さりませ、突然の事でありますが是非お供にお連下さりませと思ひ切つてぞ願ひける、中佐は顔を打ながめ、我を氣遣ふ志、不憫と思へどこゝはげまし　大「貴様ソリヤ何といふ非戰鬪員を戰線へどうして連れる事が出來るものか、夫よりは言付た馬を飼へ　金「ハイとはいへど行かねる　大「早くゆけ「ハア　大「コラ貴様何をくず〳〵して居るか、行けといふたら早く行かぬか、呵り散らされ是非なくも、心殘して出て行、中佐は跡を見送りて、アゝ

やさしい奴ぢや、呵ればアノ樣に小そうなつて行く可愛いものぢやヤ、時に内田軍曹、おまいには得利寺、大石橋、海城到る處大ひに世話に成たのみならずいつも〳〵一日の如く精勤してくれ又勇敢に働いて吳れる實に俺は嬉しい今後も引續て宜敷頼む、殊に明日は大事の戰、セタンぢや關ケ原ぢや之が取れると否とは敵味方の運命が決するのぢや、遼陽の内でも我隊の向ふ此地圖の砲壘がさうだ、旅順なら東鷄冠山と言ふ樣なもので、其咽喉だどふしても之を取らねばならぬのである、大事ぢやぞ軍曹お互に國に報ゆるの一期だ、しつかりやらうノ　内　勿論であります明日の戰は不肖精一が體は首山堡と交換する積りであります、就ては大隊長殿へ願ふて置ますが、私の家族は靜岡に居ります、が私がたとへ戰死致しましても別に糊口には差閊はありませ

ぬが男子が二人こざりまして小學校へ出して置ますがその中の一人は軍人に仕立て二代の内田精一として國へ御奉公が致させ度ございます、私が若し戰死致ました場合には、子供の教育の事をどふぞ御差圖を下さりまして行々の御引立を願ひます、

大　アヽ、夫は言ふまでもない事、俺が武運愛度く存命したならば心の及ぶ限り世話するから安心してごふぞ充分働いてくれと、明日は互ひの別れ共神ならぬ身の兩人が盡ぬ話の折からに斥候の一騎馳來り、大隊長殿前方二千米突の高地へ敵の大部隊が現れました、中佐はうなづき　大　ムヨシ内田軍曹、敵の大部隊が二千米突に顯れたと副官集合の傳令、内田軍曹進擊にかゝらふ、金次郎馬を飼せてをけ、サ集合の傳令ツ、いふ間もあらす双方より、一大隊の兵ものは隊伍を乱さず整列せり、中佐は聲を勵まし

て我大隊は愈々今より強襲する事と成つた、隊の向ふ首山堡は九十九米突の高地で三方共に削るが如き絶壁に敵があらゆる防禦の術を盡し、半永久の經營を施してある要害で、之れを取ると否とが遼陽の運命の決する處、否今回日露戰役の勝敗の決する處と斷言して憚らぬのぢや、デ我大隊はその名計りを留めて全滅を期して此堅壘を拔くの覺悟がなければならぬぞといと烈しき中佐の訓令全隊一齊同音に「大隊長いやしくも日本男兒、女々しい者は一人もありませぬ皆決死を誓います、」ナニ全隊決死を誓ふてくれるとかヲヽ勇ましい、賴母しい殊に今日は畏くも曾て御傍近く事へ奉りし我　皇太子殿下の御誕辰、又千八百七十年普軍のセダン攻撃も即ち八月三十一日かく目出度吉日に上は　大元帥陛下の御稜威を戴き、彼モルトケ將軍に

も優る奥大將閣下の軍配の下に部下には斯く忠勇の士卒あり如何なる金城鐵壁も破れざる事のあるべき一同奮勵努力せよ全隊前への號令に意氣天を衝く其勢ひ今まで靜まりかへりたる天地も思ち震動し目さましくもまた凄まじし、抑も首山堡の地勢たる遼陽城の表面に位し傳へ聞く唐の太宗北狄征伐の其昔し此處に本營を搆へたるによつて駐蹕山と號くるとや一夫之を守れば万卒も攻難して此天險に黑鳩公將軍が肺肝を碎き智術を揮ひあらゆる防禦のてだてを盡し、勝誇りたる日本軍を此處にて喰ひ止めんと賴み切たる要害なり、進むに前なき日本軍無二無三に突貫す夫れと見るより敵兵は二段に築ける俺堡に據りて一齋射擊亂射擊彈丸の續かん其限り死物狂ひに防いだりひらめく光り飛來るたま味方の先手は忽ちに將棊倒しに

成にける中佐は斯と見るよりも齒をくひしばり髪逆て怒りの眼をくわつと見開き敵壘をはつたとにらみ大「エヽもどかしやまだゆるしや身苟しくも抽んでられて前進軍の第一線に先登の命を受たる橘周太、斯計りの敵壘踏み破らでは腑甲斐なし最早迂回して進む樣な猶豫は許さぬ、鐵條網を突破り一直線に攻め入らう一死君恩に報ゆるは此時なるぞ全隊一同續々と雷霆の落來る大聲、氷の如き軍刀眞甲に振翳し獅子王の荒れたる勢ひ、陣頭の眞魁に走り出飛來る彈丸事共せず進め〳〵と叫びつゝ塹壕目がけ躍り入る、ソレ大隊長殿が突進せられた大隊長殿を打すな早くかけぬけて壘を奪へ、大隊長殿を救へ奪へ援へとまつしぐらに攻寄れば敵兵あはて騷ぎ立此處奪れてはかなわじと必死と成て打かゝる双方互ひに入亂れ、銃劍白刃打合ふ音

物凄くも又凄ましく中佐は怒髪天を衝き大「エ小癪なり無禮者めと當るを幸ひ斬倒す隊長かゝる勢ひなれば何とて部下の勇まざらん突立薙立切まくれば遁の敵兵あしらひ兼一度にどつと退却せり、中佐は猛然脱兎の如く絶頂に驅上り名譽輝やく大隊旗を首山堡の朝風に翻飜とひるがへし、大日本帝國萬歳、天皇陛下萬歳とどつと揚げたる勝鬨は遼陽附近一帶の山も崩るゝ如くなり「占めた〳〵愉快〳〵此機を逸せず追擊にかゝれと絶頂に衝立上り部下を指揮する其折柄窮鼠反つて猫をかむ性懲もなき敵軍は新手の兵を入かへ〳〵時を移さず三方より砲壘を押つゝみ最も烈しき十字火砲注きかけられ全隊の三分一を餘す外見る〳〵内に無慘の最期肉は飛び散り骨くだけ、累々たる屍の中、中佐も既に敵彈を右の拳と下腹部に重輕傷を負

ふたれ共部下に見せじ知らせじと流るゝ血汐を押拭ひ右手に軍刀左手には疵口押へ二王立身の毛もよだつ其有様敵も味方も一様に生ながらなる軍神と稱へぬ者はなかりけり、斯る處へ内田軍曹息を切つて驅來り「内」「大隊長殿此處は高地の絶頂ですから御覽の通り此砲火前面の敵が全く退却せんで一擧逆襲の態度を取て居ります實に危險に迫りましだ一度後方へ退かねば大隊全滅でございますぞと言ければ中佐は無念の大息つき「大」「エ、如何にしても殘念至極此砲壘を屠らん爲一人殘らず決死を誓ふて吳れた部下ではあるが此樣にばた〳〵殪るゝを見ては實に堪られぬが内田爰を能思ふて見てくれ今日は未來の天長節と稱すへき　皇太子殿下の御誕辰に斯く忠勇なる部下の多數を犧牲にして占領し得たる重要地點ちや乃公は爰で死

ねば本望ちや敵彈の爲に此体軀が粉な微塵に碎くる共一度奪た此要地をごうあつても見捨る事は出來ぬのだ、帝國の威信に關し又此樣に殪れてくれた多數の部下の忠魂に謝する詞かないではないが許せ軍曹つらく共　陛下の御爲國の爲め乃公と一しよに此處で殪れてくれコレ内田と慷慨悲憤の血の涙、止めかれてぞ見ねにける、折しも烈しく飛來る銃丸胸元肩先用捨なく無慘や最後の一發に臀部を深く射透され遁か豪氣の橘中佐其儘ごつと殪れたり、軍曹驚き走り寄り「大」「コリヤ大隊長殿御重傷大隊長殿決して爰を退くなとの御命令では御座りましたが御重腸の上に此砲火御手當の仕樣もありませんから遺憾ながら下の方へお供をしませう「さうちやさうちやと軍曹は殪るゝ中佐を抱起し肩に引かけ是非なくも雨霰なす彈丸の中こけつ

轉びつ麓なる小松原にぞ着にける漸くに息をつき内「アヽ爰は幸ひ比較的安全の地だ見る崖下の溜水、口に含んで中佐の顔に注ぎかけ〳〵大隊長殿稍安全の地でありますぞ御心確かにお持ち下さい呼べど叫べど答へなしどやせんかたへを見回せば彈丸に裂たる軍帽一個見るより軍曹又ひつくり内「ヤヽコリヤ此軍帽は關谷聯隊長殿のぢや扨は聯隊長殿には此處にて疾くに戰死を遂られしかど餘りの事に暫らくはあきれ果て居たりしが稍あつて心付き内「ムヽさうぢや聯隊長殿は最早御戰死の上は悔ても詮ないが大隊長殿は御重傷とはいへまだ呼吸がある せめて大隊長殿は取止めたいものだトレ繃帶所までムヽさうぢや帽取上げて腰につけ再び中佐を脊に負ふて立上りたる一刹那一齋射擊の聲諸共中佐の腹部を貫ひて其彈丸徹りて軍曹

の左りの胸を打貫かれ人事もしらず殪れけり折しも爰に吹送る風が持來る突喊の聲凄しく聞ゆれば軍曹はむつくと起き内「アリヤ我軍の突喊の聲夢の樣に思ふたがエヽコリヤ俺もやられた是ツばかりの淺傷に氣を失ふたか殘念〳〵と立上らんとする打しも轡の音にも目を醒すと譬へにもれぬ橘中佐、深傷ながらも起直り大「内田は居るか軍曹〳〵内「アヽ嬉しや大隊長殿御氣が付ましたか御疵はお淺さう御座りますぞ御心たしかにお持成さりませ大「ヤヽ内田お前が其呼吸は負傷したなコリヤ急所ぢやないか大事にせよ繃帶したか重傷の中にも部下の身をいたわる心の有がたさ内田は苦痛を押かくし内「大隊長殿御心配下さりますな私のは只のかすりきずで御座りますあなたのも御疵は淺さう御座りますぞ大「内田何と慰めて呉れても乃公は

最う駄目ぢや死ぬのは固より本望ぢやが只恨みなのは斯くむざ〳〵と部下を死なした、アヽ實にすまぬ事をして（内）大隊長殿其樣に御心を惱ましますな我隊の殘りの兵が後部隊と連絡してアレ御聞なさりませあの通り猛烈なる强襲して居ります（大）ムヽあれはどの方面を强襲するのだ（内）首山堡をでございます（大）内田ソリヤ何の事だムヽ負傷の爲におまへは精神が狂ふたのコリヤしつかりせよ首山堡は爰ぢやないか（内）エヽお痛はしや大隊長殿貴下はまだ首山堡を夢見てござるか、最前絶頂で御負傷なされた時お手當の仕樣もないまゝ此精一が肩にかけて據ろなく爰まで參りました爰は麓の小松原で御座ります（大）ナニ麓エヽそんなら乃公は退却したのか確に取つた首山堡をエヽ無念な今日はいかなる日なるぞや　東宮殿下の御誕生日に一旦

取りし敵壘を端なく敵に奪ひかへされ　陛下へ對し奉り御詫の申上樣もなく多數の部下を殺したは國家に對して相濟ぬ、又起直つて遙かなる東の方に打向ひ綾に畏き　皇太子殿下今日の御誕辰を是より祝し奉る周太が不肖を棄させられず御身近く召させ給ひ優渥なる御寵眷を被り大海一滴九牛が一毛鴻恩に報ひ奉らず武運拙く屍を遼東の原野に曝す臣が不忠を許させ給へ又二つには内田軍曹いかなる過去の因緣にや東の海と西の空三百餘里を隔し二人互に親子、兄弟にもまさりて深い親しみ合ひ其身の負傷は苦にもせずしん身も及ばぬ此介抱忘れはおかぬ嬉しいぞや死んでの後の魂魄も此樣に親み合ひ共に皇國を護らふぞやと猛き人ほど愛情にもあつき涙にくれければ内田は苦痛も打忘れ（内）大隊長殿勿体ない、ソモ出軍の始めよ

り得利寺、海城、大石橋到る處の戰ひに寸功もなき精一が身に餘りあるお褒の詞又朝夕の御いつくしみ、親にもまさる御情け未來で御報い致しませうと互に手に手を取かわし悲歎の涙にくれ居たり又も聞ゆる突喊の聲に彼方を見渡せば砲壘再び奪返し旭の旗を飜へせり、軍曹は勇み立「アレ〳〵大隊長殿御覽成さりませ首山堡を全く取返しました、軍曹に抱起され中佐は今わの眼を見ひらき「大」ム、首山堡を取返したな「内」アノ勝閧が聞へますか「大」ム、聞ゆる「内」アノ旗が見へますか「大」ム、見ゆる首山堡占領全く占領、ア、愉快〳〵と悅びに張詰めし氣もがつくりとあへなく散行く橘の花も實もある最期なり軍曹は取付て「内」大隊長殿〳〵最う是が此世の御別れで御座いますか大隊長殿〳〵と思ひの限り呼び立れとはや玉の緒の切はてゝ答るも

のは遠近のこだまの響き計りなり斯とも知らず金次郎は砲聲熄んで突喊の聲の頻りに聞ゆれば中佐が豫ての吻附は此時なりと月鹿毛の手綱かい繰り勇ましく勝閧の聲たゞりつゝ小松原にぞさしかゝる、いかゞはしけん月鹿毛は一聲高く嘶きて俄にすつくと立留り追へとも曳けども動かばこそ「金」コリヤどうしたッ物怕せしかと、金次郎見回す傍への草原に横はりたる人影はもしや味方の負傷者かと近寄り見れはコワいかに主人中佐と軍曹と折重なりし二人の有樣「金」コリヤ月鹿毛の進まぬも道理、旦那樣〳〵軍曹殿〳〵と聲を限りに呼いける内田はくわつと目を開き「内」チ、伊藤か遲かつた〳〵大隊長殿は只ッタ今名譽の御戰死を遂られた其次弟を聞てくれ今日未明よりの突喊に大隊長殿は第一番に進まれて夜明けの比には首山堡

を占領し絶頂に立つて追撃の號令をかけられしは人間以上の御行動と敵も味方も感歎せしが思ひもよらぬ逆襲にて御重傷を負ひ給ひ據なく此處まで御介抱申して引上しに又もや俺も此負傷しかしアレあの如く首山堡は全く我軍が占領しアノ旗の手を御覽なされ鬨の聲をお聞に成つてアゝ愉快ぢやと仰しやつて潔よき御臨終「エゝスリヤ占領したを御覽なされて愉快ぢやと仰しやつてかアゝ其勇ましい御最期をお側で見ぬのが殘念と又亡骸に取縋り抱き起して見上れば氣高き眉に笑をふくみ眠れる如き容貌を見るに目もくれ心消ゑ」コレ申し旦那樣金次郎でござります霄に營所で御申付けに鐵砲の音が熄んで突喊の聲が起つたら勝軍の知らせぢやから月鹿毛を曳て來よとの仰ゆへ參つて見れは早御戰死アゝ是迄明け暮れ御心

に懸られし　皇太子殿下の御誕生日に敵の砦を占領し此世からなる軍の神と崇めらるゝ程の御行動は嘸御本望で御座りましやうさは去ながらいたはしや今日の軍にお勇しう召せん爲に秣かい飲ふて來た此馬に御戰死なされた亡骸を乘せ歸るとは知らざりしと悔み歎けば月鹿毛も重き首をうな低れて物言ひたげに幾回か中佐の遺骸を嗅き廻り打悄たれし有樣は憐れにも又殊勝なり「軍曹は氣を勵ましコリヤ金次郎いか程いふても名殘は盡ぬ衛生隊まで中佐の遺骸を月鹿毛にお乘せ申てサ早う俺も一しよにお供する」金軍曹殿あなた其負傷で」内「ナニ是しきに俺は大丈夫だと勵す詞に金次郎力なく〳〵亡骸を月鹿毛の背に抱きのせ腹帶解いて鞍坪に結び付けたる主從の三世のつなぐ繩手綱ひかるゝ緣と軍曹も痛手を屈せず立上りよろ

ぼい〳〵出て行、過ぎし彌生に勃海の廣瀬に散りし敷島の日本武夫の櫻花是は首山の曉の露と消え行く花橘色香も優り劣りなき海陸二人の軍神、右近の橘、左近の櫻と千代萬世も動きなき大内山の瑞籬に香りを永く傳ふらん。

新作淨瑠璃

日本武士雙樹櫻

沖横川兩勇士鉄道破壞遭難の段

渡部松菊齋作

爰ぞ名に負ふ清國の滿洲の北隅に當りて、長白山の峰續き人跡絶たる谷間に、天地に轟く雪あだれ、耳を掠むる遠吼にて、虎狼や熊の聲、實に物凄き僻地あり、比しも四月の初つかた、まだ春しらぬ高根より矢を射る如く吹おろす、いと〻烈き大吹雪物のあやめも道線もわかぬ野を越へ、山を越へ膚を徹ほす寒風は鋭き刃の如くにて眼もくらみ呼吸さへ早絶々なる刺摩僧二人互に援け、助けられ窟のかげに辿りつき、あたりを見廻し吐息つき　沖横川君、今日は非常の寒氣ぢやが、君は身体が大丈夫か　横ム、僕は

大丈夫ちやが、君は些と弱つた樣ちやの　神「イヤ別に弱りもせぬが日本から早咲の櫻は最う盛りの頃ちやのに、時ならぬ此大吹雪で息つく事も出來ぬには閉口た　横「それに君は暖國の九州育ちやから寒氣に堪へ兼るは尤じや、奥州の雪の中で生れた僕でさへ今日などはこたへる、英國のチエームス氏の探險紀行に據るに黑龍省は三月下旬氷点以下十八度とあるから此邊は寒いわけぢや、併し寒さ凌ぎはブランデーに限る是を呑で凌がふサア酌をする　神「ヤア辱けない一ツ頂かうか　横「時に僕は寒氣に堪えるかはりに、暑氣は實にたまらぬよ今に忘れぬが、日清戰役の時朝日新聞の從軍通信で高千穗艦に乘込み澎湖島から臺灣に往たがアノ邊の炎熱には閉口したよ　神「ヤ夫で思ひ出したが威海衛攻撃の時君が高千穗艦長野村大佐の紹介で水雷艇へ乘込

んで大危險を冒したといふ奇談の有たのは其時の事か、　横「ム、夫は其の年の春の事、水雷艇長が拒んで危險でもあり又た邪魔にも成るから止せと言はれたが强情に乘込んで行て見たがヤ實に〳〵危險極るものぢやよ、僕も冒險好ぢやからボートへ乘て千島へ行つた事もある其時も隨分ひどいと思つたがどうして〳〵そんなものぢやない、眞に水雷艇には驚いた、我海軍が水雷攻撃の任務を受けて働く所を見れば、其健氣さ實に同情の感に堪へぬナ夫れはそうと君はこんな話を誰に聞たか　神「ヲ、夫は故國の唐津の舊藩主小笠原中佐殿に聞た其頃は大尉で而も高千穗の分隊長で有た、實際目撃した事ぢやと云ふて頻りに君の事を賞賛して横川君はいつも危險を冒して戰鬪の眞先に立ち、仔細に視察して綿密の通報に勤めて居た實に軍事に於ける

通信者の模範ぢやと言うて居られた夫で僕は君の精神に感じて其比から窃に兄貴と思ふて慕ふて居つたのだ「ヤ所謂知己の言ぢや辱けない併し君より年齢の上からいへば僕の方が兄ぢやが其瞻勇は到底九州男兒の君には及ばぬよ君が彼の船倉松次郎を藻原の海岸へ誘ひ出して國家の爲の事業だから加擔せよ否なら是だとピストルを向けるなどの行爲は通常の者には出來ぬ仕事ぢや是が軍人であつて戰場での働きならば其功績が世間にも知られ、恩賞が子孫に及ぶと云ふ名譽もあるが、君の如きは錦を着て夜行くといふ諺の通りで、たとへ拔群の功があつても、世に知らるゝ望みはないのぢやから眞個の忠信、眞個の瞻勇でなければ出來ぬ事ぢやからノ沖「ヤア横川君頻に僕を九州男兒〳〵と賞めて吳れるが東北男兒も豪いよ、又僕から見

れば君が恰度その通りに見ゆる、夫子自らの玉ふのぢやないが併し僕も既往三十年の境界を考へ來れば隨分久しいものさ、平戸の小學校生徒時代から、猶與館、又、熊本の濟々黌、東京の早稻田といふ樣に遍歷してさま〳〵の事もしたが、僕は社會からは疎暴一点の者ぢやと誤解されて、半生涯を送つてしまうた僕の眞の精神を知つて居らるゝは針尾島の楠本碩水先生か、君ぐらいの者じやろう、事志と合わす杯と、不平と欝悶に驅られて居るよりも、今斯やつて居る事が國家に盡す萬分一と思へば此艱難が寧ろ樂しみぢやよ、ア、ブリンデーの御蔭で少しぬくもつて來た、君も一ツ呑み玉へと互に親しく汲かはし暫し吹雪を避居たり、折から峯より來る人聲、何者なるかと兩人が、見る内二人の大男、山狩鐵砲をかつぎ通り掛りて不審顔、狩「チイあなた方何處人

ありますナンデこんな處マロしますと見咎められて兩人は俄につくる詞つき（沖）イヤ私共は御覽の通り蒙古人あります、ハルピンの方マロします、近道ありと聞まして山中へ來ましたが此大吹雪で行先分りませぬ、困りありまして爰に休んで居ます、あた方此土地の人ありますなら、どうぞ敎て下さりませと誠しやかに賴みける狩人共口々に（横）ハア俺等は此ずつと麓の村の狩人、熊打ちに來ましたが此吹雪に逢ふて歸り道あります、あゝた方知るないか、此邊中々物騷あります、今度日本と露西亞と戰はじまり、此邊馬賊來まして、鐵道こわします、電信切ります、露西亞怒りまして、兵隊大さんつれて、憲兵大佐來て居ります、怪しい者見る直ぐ縛ります鐵道の近い處却つて危ない、アノ向の山間に細道あります、只十里も往かねば人家ありませぬ、ヲ、いとし

の旅僧方や大事マロ〳〵する事よろしと、かたちにも似ず懇に指さし敎て辿り行く、影消るまで見送りて二人はほつと溜め息つき（沖）横川君今のは、てつきり山賊と思ふたら狩人であつた、今彼等の話を聞に我部下の馬賊の働きが大分敵方に感動を起さしめたと見ゆるノ（横）ム、大佐が率ゐて居るといふから、大かた一聯隊位の兵數だから夫れだけでも敵軍の勢力を此方面へ割た譯じやからノ（沖）さうじや併し横川君、さつきもいふ通り同じ日本とは云ひながら東の端から西の果五百餘里を隔て生れた兩人が斯ふ心の一致したのも實に不思議といふの外はないノ勤王僧の信海の歌に「西の海東の空とかはれども、心は同じ君が代の爲め」此歌は我等兩人の實況を表情して居るノ御互に身には刺摩の衣を着、露國人の目をかすめ蒙古の野山を横斷し

て五十餘日の長の旅、或時は山に眠り或時は橋もなき河を渡り猛獸には襲はれ千辛萬苦して漸々此奥滿洲へ忍び込み、馬賊の群に入りて互に參謀長とあつて鐵道線路を破壞し敵國軍隊や兵糧の運送を防げ、又は電信を斷つて軍用通信を遮斷るなど晝夜の分ちなく勞働するのも、國の爲めと覺悟せし我々ながら今日の樣な猛烈なる寒氣には實に敵せられん、同志六名の内でも斯んな奥まで入込んだのは、杖とも柱とも君と僕と、たつた二人だ、どちらが倒れても困るから、君もあまり我慢を張らずに國の爲じや自愛してくれ玉へよ 横 沖君決して心配してくれ玉ふな正義に渥き日本男兒は天も祐け神も守護し給ふから、寒氣や猛獸も我々の身体を傷める樣な事はないと僕は信ずる夫れより も先刻狩人の話を聞くにつけ彼横暴なる敵の偵察隙に我々が

日本人たる事を知られぬ樣にせんければならぬ、少なくも我軍が旅順港を陷落し遼陽の敵を追ひ奉天及びハルピンの總攻擊迄はどふぞ露顯せぬ樣に仕たいものぢや、夫れまでは大に注意すべしだ 逸 大に然り、馬賊も今は我々が籠絡して居るけれども一旦利を喰らわしむると直ぐに變心して仕まうから之れ迎も油斷はならぬ、處で旅順にも既に四回の攻擊、又先例もない港口閉塞まで遣つたといふから、近い内に我陸軍が滿洲の何れの一角かへ安全に上陸するに違いないから、愈々以て我々の企てが必用に迫まられて來た、君愉快にやるべしちやノ 横 オ、大に遣る可しさ、デ今迄の樣な小さな仕事より奮發一番、彼の嬾江橋附近で、大破壞をやつ付ようと思ふて引連れて來た馬賊の同勢、跡の森の中で此吹雪の爲に見失ふたが斯ふ暗くなつては我々の

所在も知れず彼等も大に探して居る事ぢやろうノ、何處か燃料を見付けて目印に焚火でもしやうかの（神）イヤ夫は止そう、馬賊の奴等の目標に成ればよいが人里離れた此山中に焚火する道理がないから若も敵に見付られたら千日に苅つた萱ぢやないか、今少し待つて居やう、成程いかにもそうだつた、暫く爰に待つて見やうと後先の事思ひわび待詫びてこそ居る折しも、ますます降り來る吹雪につれ幽かに聞ゆる砲聲に二人はキツと耳そばだて（横）沖君アリヤ鐵砲の音が聞ゆるぢやないか（神）イカにも慥に麓の方コリヤ部下の馬賊が敵の偵察隊と衝突したのぢやろう（横）ム、衝突ぢやシモーた事をしたナー馬賊でも今は我部下ぢやサ應援しよう助けよふと身こしらへする折から麓の方に人馬の物音、油斷ならじと兩人はかたづを呑んで待つ處へコ

サツク騎兵兩三騎手鎗小脇にかひ込んで馬上ゆたかに進み寄り（兵）あなた方蒙古人うそあります私共と一緒に來るよろし、思ひがけなき一言に是はとと思へどそらさぬ顔（横）私共はハルピンの方へ行く刺摩僧ありますヤ人違ひ有ります、私共あなた方と行く事有ません、スリひ往んとするを哥薩克騎兵鎗を逆手に取り直し（兵）ヤアあなた方遁げるいけません、私共此處で縛ります麓のツルチハ停車場近くで馬賊三十人縛りました皆々白狀しました、あなた方は强い〳〵日本士官あると云ひました夫れで一中隊で取圍んで仕まいましたモー〳〵動く事なりませぬ、こいふより早く吹き出す兼て相圖の呼子の笛聞て兩人無念の顏色、是れ迄なりと心を定め（神）エ、横川君モー駄目だエ、やつ付けやうか（横）沖君殘念

ちやが仕方がない決心せうと豫て用意の仕込杖拔手も見せず兩人は右と左へ切掛る折しも人馬の音高く大勢の露國兵銃劍打振り突かゝる、こなたの兩人事ともせず敵兵二三を切倒し小高き處に驅け上り四方をきつと睨み付け（沖）「斯ふ成る上は姓名を僞りて遁れんとする卑怯未練の我々ならず、如何にも推察の如く大日本帝國の臣民であるが日本男兒が敵に向つて名乘を揚るは昔からの作法がある少し冐頭が長からうが後學の爲め聞て置けと一ト際聲を張上げて、遠からん者は音にも聞け、近くは寄て目にも見よ我は大明國の末世に四百餘州に名を轟かせし國性爺鄭成公の產聲を揚げたる肥前の國平戸に生れ、我舊主君たるは嵯峨源氏の嫡流、河原左大臣より出元弘建武の頃孤忠以て南朝に盡し曾て後醍醐帝の密勅を奉じ、九州の同志を糾合

し畏くも錦の御直垂を賜はりたる勤王無二の家柄にて、今帝室の藩屏たる伯爵松浦肥前守源詮朝臣の藩臣、又朝鮮八道を蹈にかけ鬼上官といふ名を聞てさへ赤兒も泣止んだといふ加藤清正が築いたる熊本城下の中學校濟々黌に人と爲つた九州男兒の沖禎介だ（横）「余も日本の東北男子、彼樺太の遺恨より不平は胸にみちのくのしのぶに餘る憤慨に正義を縱と横川省三、最う斯成つては切り死だ大和男兒の腕前、日本刀の切味を有難く賞翫せよと大喝一聲飛びかゝり當るを幸ひ切倒す遁の敵兵あしらひ兼、しどろに成つて遁げて行く折しもハツク中隊長、馬上より聲高く（中）「コリヤ皆遁げる事ない、敵はたつた二人ぢやないか一同進めと隊長の聲に皆々勢ひつき、又引返して打かゝる、衆寡敵せず兩人は數ケ所の手疵に身体疲れ踏足さへも雪の上ごふと

轉べは敵兵は得たりや應と乘りかゝり組伏せんとするを刎返し上を下へと揉み合ひ押合ひ多勢を相手の二人の働きめざましくも、又勇しい、昨日まで虎ふす野邊と荒れ果し北滿州の奥深み世は烏羽玉の黑龍管區鐵道守備の特務隊フルベル大佐が假營所榾拙火の周圍を取卷る牛頭馬頭もどきの哥薩克兵焔魔の廳か山賊の棲家かとこそは、見疑わる、かゝる處へ巡羅長大佐の前に一揖し巡第二十六中隊シワチハッタ中隊の一隊鐵道線路南の方蒙古方面巡視の折柄、ツルナハ停車場より十八露里の處に於て蒙古服を着たる怪しき二人のくせものを發見し全隊惣掛りと成つて取圍みしに鬼神か天狗かその早業、重輕傷者拾餘名即死者五名を出す程の中々手強き働きなりしも辛ふじて搦め捕り、所持品取調べしに、スミト式の短銃二挺、詳細なる地圖、綿

密なる製圖と日本刀の仕込杖二本、デ彼等は日本人にして冲禎介横川省三なりと唯姓名を名乘しのみ外は一言も口を開かずなれども其黨類馬賊三百餘人ある事を探知したる故、ハック中尉は夫等捕縛の爲に向われ我等巡羅隊にて右兩人のくせ者は是迄引立參りました、息を切つて訴ければ大佐不審の顏色ナニ日本人ハテ心得ぬ此奥滿州へ何より入込しか兎に角本營へ送るまで一通り余が取調べん、ソレ其のくせ者此處へ引ずり出せと呼れば身を鴻毛の輕きに比し義は泰山と荒炭を呑んで啞とあり身に漆しせし唐土の豫讓がためし引出さる刺摩僧に身はやつせども色香は外にあらわるゝ日本櫻の二人の益良雄をめず臆せず座に着けは大佐二人を遙に見下ろし大「ハザムール後黑龍管區内の鐵道守備憲兵隊長フルヘル大佐は余の事ちや

六七月に到る迄は鳥も通はぬ此山中へ只二人で悠々と入込む程の大膽奴等はヨモ只者ではあるまひ、殊に其面たましい、察する處日本軍の士官たらん、其官姓名を早く名のれ、神「我は大日本帝國長崎縣の冲禎介でござる 横「某は同岩手縣の横川省三、二人共に軍人でなく無位無官の者であるが、待ち構へたる日露戰爭の報に接しても身戰闘員に加はる事のならぬ無念さ、せめては我軍隊に一臂の助けをなし萬分一の辛苦を分たんと思ひ馬賊と語らふて鐵道破壞を企てしも、まだ十分の目的を達せざる半途にて、不幸にして事顯れ、斯く成行くは天命也、早く足下の國の法律に處するの手續に及ばれよ他にいふ事は何もござらぬと苦り切つて言ひ放す大佐は何か心にうなづき賺して見んと詞を和らげ 大「ナニ軍人でないと申すかムヨシ然らば問んがたと

へ、軍人あらず共汝等、露西亞の國は知り居ろうノ 神「ム、成程知つて居る、露國は歐羅巴の北部に位ひし餌に飢たる荒鷲の如き鋭き眼を以て東亞細亞を付け睨ひ、其蹴爪を一度ニコライスクに懸てより、二度黑龍江の地に及び三たびウスリイの東岸を呑み四度ホルゴース河の西を裂き、五度旅順大連を占め夫れにても飽足らず、韓國まで翼を張り馬山浦、龍巖浦までついばまんとする飽く事知らぬ暴慾の恐ろしき大國なるを知る 大「其大國と知りながら、及ばぬ事の腕立せんより、大きな者には呑まれ長い者には卷るゝといふ世の諺を知らざるか 神「ナニ大なる者には呑まれよとは、寡は衆に敵せずといふの意味でスリヤ正義と正義の戰ひの事、我日本帝國は、朝鮮を救ひ支那を援け、東洋の平和を保たんと大仁大義の軍なり、足下の國は之れに反し滿州を侵

略し、朝鮮を併呑せんと横暴非道の軍かり義と慾とは相伴ぬ、我楠正成は僅に七千餘の兵を以て、百萬の賊軍に當りたる例あり、順を以て逆を伐つの故なり、勝敗は正邪の二道にあり兵隊の多少にはよらんのだ、ちつとも動ぜず空嘯く、大佐は詞を荒らげて

「余が今試に問ふたのは汝等の身分を態とさぐらん爲、ア、雉子も鳴ずば打たれまじを自ら軍人たる事を我とわが身の白狀同然、コリヤ鐵道破壞のみではあるまい、軍事の秘密を齎らして入込みしに相違あい、去にてもいぶかしきは日本軍はまだ韓國義州にありて鴨綠江さへ渡らぬ筈殊に黑鳩公將軍の備へ居る遼陽奉天哈爾賓までも通り拔け、此奥滿州へ入込むとは翼なくてはかなわぬ業、何れの地へ上陸して、何れを經て入り込みしか又日本軍隊の總員は何程ある、汝等は何軍に屬して居る眞直に

白狀せよ、本營へ送らるれば拷問の苦しみを受けた上銃殺されねばならぬ此所で白狀すれば、命を助けたる其上に黑鳩公將軍に執成して露國の士官に取立遣わす俸給も望みに任す汝等我國の富るを見よ旅順の防備、青泥の繁昌、遼陽の要害、奉天のかため是へ費した金計りでも、積つて凡そ二十億ルーブル汝の國の總歲入の十年分に當るちやないか斯く小國の分際で我露國に弓彎とは蟷螂が斧同然、正義の軍は兵隊の多少にはよらぬといふた汝等が我巡羅隊の多勢の爲に二人共に其樣に眼前縛り上げられて仕まうたちやないか寡なくても勝るならなぜ其ざまにくゝられた、サア最前から問ふ事を逸々返答せいコリヤ早う云はぬか、ぬかさぬか、エ、いつ迄も意地を張らずと早く秘密の白狀さらせと傍若無人の出放題聞く二人は堪りかね、冲は大佐

をハッタと睨らみ「エヽ、早く本營へ廻されてアレキシーフか黑鳩公に逢ふてか、又は軍法會議の法庭で十分欝憤を吐たいからそれまでは、あつたら口に風を入れまじと思ふたが餘りといへば暴慢無禮、足下の目より我々が左程まで軍人と見ゆるならなぜ相當の禮を拂ふて待遇せぬか今や身に寸鐵も帶ず抵抗力を失ふて居る者を盜賊も同樣に高手小手の此はづかしめ足下には正義の道は解るまいかしらぬが、能く落付て聞て置れよ、我日本帝國は天祖天照大神より　今上陛下に至るまで皇統一系天上無窮世界に類ひなき尊き神の皇國である、開闢二千六百年一度も外國の恥しめを受けたる事なき、名譽の歴史を存して居る日本武士の國不覇獨立の國其臣民たるものは男女老幼を問ず日本魂といふ忠勇無双なる特性を持て居るのである」今沖

君のいふ如く万世一系の天皇を戴いて一種一族にして子々孫々名譽ある臣民ぢや、成程露國は土地も廣く人民も多いが、それは弱い國を攻めては取り〳〵種々樣々の人種の寄集りが壓制されて據なく從うて居るに過ぎない、夫れ故にさま〳〵の黨派があつて一朝事ある時は、其機に乘じて内から騒ぎを起す事が之れまで屢々あるではないか、自國の行政も行届かぬのに弱みに付込み清國、朝鮮を蹂躙り、我儘至極の振舞ひ、東洋の危險日一日と逼まる有樣を我日本帝國で見て居る事が出來ると思わるゝか、即ち天に代りて義軍を進めたのぢや、見られよ海に陸に連戰連捷皆之れ我帝國の義俠を天の祐くる處ぢや、足下の國では此敗軍に狼狽て俄に神に祈るとも天帝は眞理以外には福音は與へられぬぞ」横川君痛快に論じたな僕に最一ッ云はしてく

れ、最前日本の秘密を話せとの事だが我日本は正々堂々皷を鳴して不義を討つのであるから、別に秘密の事はないが日本兵員の實數を明かせといわれるから今言ふから驚れるな我日本の臣民は、士農工商押なべて一朝國に事ある時は特性の日本魂を發揮して自家の私を忘れ君國の公に奉じ、体力有者は体力を以てし、智力有者は智力を揮ひ、金力ある者は軍資を出し老幼婦女子に到まで皆夫々に責任を盡し全國恰も一家の家族の如く出征軍人の後援に日も又足ぬ有様ゆへ語を替て短く言へば五千萬人悉く皆兵隊だ、又最前二十億圓を費やしたと自慢した、旅順ダルニーはぞふして得た土地であるか、十年の昔を顧られよ、明治二十七八年日清戰役の際、連戰連勝の結果贏得たる遼東半島、之を永く日本の所有とするは東洋平和に害ありとの口實の下

に足下の國が主となり獨逆、佛蘭西を語らひ來り忠告がましき干渉により折角得たる新領土を、無念の涙を呑みながら、みすみす清國へ返してやつたのだ其舌の根の乾かぬ間に裏面から手を廻し曩きに我帝國が五億餘萬の國費を捨て十萬の兵隊が熱き血を流して得たる土地を足下の國では、一發の彈丸を費さず一人の兵員を損ぜず、只三寸の舌を以て清國をそゝのかし濡れ手の粟でまん〳〵と占領してしまふた、我五千萬同胞は以來十年のその間一日も此遺恨忘るゝひまなく堪忍の二字と戰ひつゝ時の來るを待つたのだ依て我々は此欝憤を晴さん爲に、爰に入込み此事を企てたのだ、サア白狀は此通りだ、此言を憎しと思わば、我口を烈き、我舌を抜け、たとへ此處で殺されても、日本魂は死なぬ、必ず初一念を貫くぞ 横チヽ冲君愉快によふ言ふた、ど

うせ無法に殺さるゝのだ横川も最後に一言せん斯く國難の時に當り、疊の上で死ぬのは我々の本懷でない鼎鑊甘き事飴の如し慘酷なる刑律の本に、甘んじて死ぬのである、されども我々の精神は火を以て燒くべからず、水を以て溺らすべからず、況して や大强國をかさに着ての威し文句は何かあらんやだ、頓て見よ我日本軍が堂々ピタルスブルグの都に攻め入、城下の盟をなす時か又は露帝が力盡き、白旗を立て我軍門へ降參を言ひ入る日にその時はじめて潔よく、笑つて地下で目を瞑るのだといつかなひるまぬ決死の男兒大佐怒りの齒嚙みをあし大「チエ、憎つくきヤポンスキー奴此上は本營へ廻し、うき目を見せて日本の秘密白狀させいでは置かうかソレもつと嚴しくくゝしあげ、本營へ引立てイと下知の下、無慚や二人は繩身の苦痛互に無念の

齒がみをなししばられた手を握り結め、血走る眼髮逆立怒れる顏色物凄く、皆一度にそゝ髮たち身をちゞめ居る其折から鐵道守備兵慌たゞしく息を切つてかけ來り急報あります 大「心得ぬその有樣何事あるか早く語れッ 兵「ハ、されば〳〵大佐殿の仰せに隨ひ線路を守護するその折柄馬賊の團隊三百計り吹雪も頻りにフリヤールジの停車場間近く寄せ來り、我首領と仰いたる日本の義士沖禎介、横川省三、露國兵に捕はれたり、我々代りて鐵道破壞し二人の本意に報ゐんと見る〳〵內に三哩の鐵路は忽ち破壞され報知をせんにも、電線も切られ、救ひを求むる暇もなく守備隊大半打殺され、斯共知らぬ蒸瀛車は一聯隊の兵をのせ、時刻違す進み來て、大橋にかゝる一刹那、馬賊が仕掛けし地雷に觸れ橋諸共に瓦落〳〵と數百丈の谷底へもんどり打つ

ておつ落て仕まうた、何かは以て堪るべき一千餘名は悲鳴の最期、瀛鑵車、客車、貨車共に、微塵に碎けて飛び散たり此被害の回復は中々容易に候まじ、猶追々の報告といひ捨て又も引返す聞く兩人は心地よく縛られながらも勇み立ち 神「横川君アレ聞たか實に愉快ぢやヲ 横「冲君馬賊でも遁が一旦部下に成つたのぢやから我々の爲に復讐的に一千餘名の敵兵を鏖殺しとは我々の志の萬分一を貫たと悅び勇めばフルベル大佐は地だんだふみ 大「チエ返すく〳〵も憎くき奴等めソレ引立イ 神「待て〳〵 横川君自分共が縛られて行を自ら送るといふ詩が出來た斯ぢや暴横俄夷是國仇、十年遺恨依何酬、 横「ヤ自分で自分を送るは面白い轉結は僕が次がう、捨身取義男兒事、一劍飄然入滿洲、吟じ乍らに兩人は悠々として立上る、實に日本の快男兒武士の鑑とふた木の

櫻、後の世までも芳しく其名を永く傳へけり。

國民教育

新作淨瑠璃

明治天皇御聖德

外國使臣感泣

渡部松菊齋著作

ローゼン公使退京の段

入あひの鐘の響きも霞が關、花の都の名殘ぞと夫人を伴ひローゼンが小村大臣の官邸に、別れを告る訪問に、行き交ふ人も黃昏時、案內聞ゆる玄關口執事はとつかは立出て、執是は〳〵ローゼン男爵、ヤ御夫人も御一緒のお出で御座りますな、ロ夫ハイ明日の出發で愈々國へ歸りますから、お暇乞に參りましたと、御執次を願ひますといふ詞さへ打萎れ、外に詞も口籠る、ローゼンも慇懃に、男爵閣下は御在邸でございますか執イヤ主人は今朝より參

内致され、まだ歸られませぬ、」「御不在、ア夫は殘念、シテ奥樣は熱ハイ夫人は居られます兎もあれ御通り下さりませ、客室へず伴ひ入る、斯こしらせに小村夫人しとやかに出迎ひ　夫是は〳〵ローゼン男御夫婦とも能うこそ御出下さりました、扨承りますれば、是れまで種々御心配の事も御交際も愈々破談の御場合御心情御察し申上ます、私共に於きましても殊に殘念に存します、就きましては御承知の通り硬直一片の所天小村でございますから、平和の破れを遺憾の余りか、此頃は邸に居りましても不興勝ちでございます自然貴方へ對しても或はお氣障りの事も御座りませうなれども、お互ひに職務の上の事と思召されて惡しからず御推察を願ひます、」「ヤ是は御夫人の痛み入たる御挨拶、男爵殿の御不興も御尤もで、私も是非平和に事を治めたいと、去

年から幾回か本國へ向けて委しく事情も述べましたが私の意見は少しも用られず、到々今日の有樣に成ました、私も　先帝の時より久しう外交の事務にも當りましたが、實に此日本は皇統一系天壤と無窮、世界に類ひなき尊き御國体、かゝる目出たき御國に一日なりとも永く駐在を命ぜられて、居るのは有難い事と思ふて居りましたに、愈々明日は出發の始末、奥も名殘を惜みまして、御國は氣候は温暖、風景には富み、山水の眺めも美しく、實に第二の故郷であると、片言交りに日本語で御語するまでに成ましたに、是非なく歸國は致ますものゝ、どふぞ是迄の通り御互ひの中の私の御交りは、相變らず願ひたいと申まして、御暇乞旁々連立て參りましたと身を謙たる挨拶に夫人も漸々顔を上げ、本國よりの嚴命にて、是非なく國へ歸りますが是迄平和に治ま

りました御交際の破れたるは、我々の不行届で面目も御座りませぬ。夫「今所天ローゼンの願の通、此後とてもお心かはらせなう、せめてお文の音信なりと、下さる樣に願ひます、跡は詞もなみだなり、小村夫人も氣の毒餘り」夫「イヤモお心情お察し申上ます、折角お馴染申ましたに私共も一入お名殘惜うございます、互ひの情も婦人同志、言ひ慰むる折からに、表に馬車の轟く音、大臣殿御歸邸と玄關のゝめく聲につれ、執事は直ちに出迎ひ」執「御機嫌能くお下りてございます」小「不在中誰も見へなかつたか」執「ローゼン男御夫婦が、先刻よりお出でお待受けでございます、述る詞に小村男爵其儘客間に入來り、」小「是は〳〵ローゼン男、最後の御通告を申てから、御訪問も致しませんでしたが、愈々我栗野全權も公使館員と留學生を率ゐて、本日貴國を引上る趣電報に接しま

した、シテ貴下方も明日が出發とこの事、嘸御多忙ならんのに、御夫婦共改りての御來訪却つて痛み入ました、詞の表はかはらねど、穩かならぬその顏色、夫人は傍より引取りて」夫「イヤローゼン男御夫婦には御暇乞として御越し下され、殊に此後とても私の間柄の交際は相變らずしてくれとの御懇切の御話でございますと、所天の手前を執成す詞、小村男爵威儀を正し、」小「ローゼン男、何事も六日のあやめ、最早時機は去りました、今朝急の御召に依て閣員袖を聯ねて參内、愈々本日を以て、貴國に對する宣戰の詔を煥發せられました。」ヱ、スリヤ、宣戰の詔勅、ハハア、はつとばかりに、ローゼン夫婦覺悟の上も今更に恐れ畏こみ奉つる、主の男爵詞を續け」小「謹んで詔を按ずるに、不幸にして露國と釁端を啓くに到る、豈朕が志ならんや、この御主意で萬止むを得ざるに

出でさせられたのです、斯の如き事情に成行たのも畢竟貴國の政府が毫も誠實の念なき結果で平和に盡瘁せられた貴下に對して過去りたる事を繰返すは不本意の事ながら去二十七八年我帝國が朝鮮扶植の爲、東洋平和の爲に、五億圓の國費を捨て拾萬の精兵が熱血を流して、勝得たる遼東半島、當時清國の大臣李鴻章と我馬關に於て公然の條約を以て割渡されたる我新領土であつた、然るに貴國と獨逸、佛蘭西二國より遼東半島を日本の所有とするは東洋平和に害ありとの御忠告であつた、ア、此御忠言は我日本帝國に對しては實に青天の霹靂でした、なれども假初めにも平和に害ありと言ふに至りては、己むを得ず鮮血の代償品ともいふべき、占領地をも見捨ざるを得ざる場合に成り、涙を呑み、清國へ返しました、しかし日本が所有して害ありとせ

ば、他の三國の內で之を占領するに於て、害なしとは決して言ふべからざるの理である、然るに當時忠告の主唱者たる、貴國では其報酬として、清國に迫りて旅順大連を得られた、我忠勇なる日本民族が淋漓たる血を流して、獲た天然の良港を一發の彈丸一人の兵員を費さずして占領せられたのみならず、砲臺を築き防備を嚴にし、又北清事件以來滿州へ數多の兵を屯め置き、其撤兵の約束期限に至りても、一人の兵員を引上げず曾て我國にて得たる權利區域をも擧げて自分の囊中へ收め入れんとする、是果して萬國平和會議の主唱者にして而かも我に向て東洋平和の忠告者の本部ある、露國の所爲として成さるべき事でありませうか、實に我日本國民の面上に拭ふべからざるの一大汚点を蒙したのです、然れども我帝國政府は、平和に局を結び度去年七月

を以て日露兩國親睦の基を永久に保つの目的にて口上書六ケ條を草し、栗野公使の手を介して貴國外務大臣ラムストル伯に致したるに、あらゆる遁辭と口實を以て又延期又日延と徒らに時日を費やさしめ、一方にては益々軍備を整る有樣、サ此間我國民の激昂は愈々極点に達し、是を我々國務大臣が優柔不斷にして外交の機會を誤まるものとし、昨年の國會に於て我々閣臣を彈劾の上奏を決議する場合に至りし事も皆貴下の御承知の通りの事情、我に於ては其上にも平和を思ふ故に、涙を揮つて議會に解散を命じ、一面には貴國の返答を待つたのでした、處で貴國の答案は、滿州に關する條項は悉く削り去て日露兩國の協商は全然韓國丈に關する物とし、其上に韓國領土の一分たりとも軍事上には使用ぬといふ事を見認めといひ、又その北三分一程の

地を割て、中立地と定め双方から手を入れまじと誓へと言ひ、却て以前にもまさる我儘勝手なる返答、顧れば去年八月より文書電報の往復實に五十一回日子を費す殆んど半ケ年に亘り、かゝる結果に成ふとは夢にも思わなかつたのです、斯の如き貴國の主意とは考へ及ばず、我々閣臣は國民一般の誹謗攻撃を忍び、專心一意平和を望んだのであつて畏くも我　陛下に於かせられては、殊に東洋平和に軫念せられ、此程は日曜休暇にも關わらせ給はず、親しく國務を攬わせらるゝ程に在すのであります、我政府は上は　陛下に對し奉り恐懼の極み、他は國民の公憤に對し最早耐忍の餘地全く絶え、自由行動に訴る外手段なき事に成つたのです、斯く斷然の場合に至り、如何に私情の交際にせよ、貴下と拙者の間に何か消息を通ずる樣な事あつては忽ち世間の疑

ひを惹起し、時有つて平和恢復の塲合に却つて妨げに成ませう、折角のお別れに臨み斯樣な事を申上るは最も遺憾とする處であるが、最早多くは申さず、只々貴下の御諒察に任すのですと詞を盡し理をせめて思ひ切たる風情なり、ローゼンは最前より默然として居たりしが　ロ「ヤ御說一々御尤、最う達つてとは申ませぬ、元の公使と思召さず只外國の一友人ローゼン一己の話として一通り御聞下さい、私も是非平和に取まとめたく本國へも幾回か意見も申送りましたがお國と關係の事は都てアレキシーフ總督の、指揮に依とこの政府の嚴命夫故、是非なくローゼンは密かに旅順へ三回往復、戰爭の不利なる事委しく諫め爭ひしが取り上げなきのみならず、我を日本に媚諂ふ不忠者よと寃の謗り、果ては到々今度の破談、全く我不德不才の致す處と實に遺憾に

堪へませぬ、只此上の御願は駿河臺の敎會堂とニコライの身の御保護を願ひます、又殊に申上たいのは、今日圖らずも三宮式部長官殿と、香川皇后宮大夫殿とを以て　兩陛下より我々夫婦へ種々美しき結搆なる御餞別を賜わりました、ア、あはれ平和の時の歸國であれば恐れ多くも參內して御禮をも申上、お暇乞も仕るべきに夫もならぬ今日の成行、明日は二月十一日、お國に取ては大切ある紀元節、ア、昨年までは ローゼンも、英、米、獨、佛、伊、太利を始め二十有餘の條約國の全權公使の列に加わり、雲井の御所へ召させられ御杯も賜わりし身の月こそあれ日こそあれ、其紀元節の明日に、お國を立去らねばならぬといふは、實に人間の盛衰は、夢の間とは云ひながら只一年にかほどまで、かわり果たる我身の上、ア、駐在多年の其間露ばかりの効もなき、不德不敏

のローゼンを憫れと思し召させられ辱くも御餞別まで下し賜る御仁恩、アヽ恐れありや勿体なや、ローゼン國へ歸りても此世に斯て有る限りは日本　皇帝陛下の萬歳を遙かに祈り奉ると我々夫婦が歸りて後、ローゼンが別れに臨み有難がり奉りて斯く申遺して歸りましたと、恐れながら閣下より、御奏上下さりませ、是迄のよしみをお思召され、御聞届下され男爵殿と耐ねに耐えしローゼンが眞實現はす有がた涙、遺が我強き小村男爵、夫人は元より女氣の夫婦の心根思ひやり、暫し詞もなかりしが稍ありて貌を和らげ「ヤ御述懷の一々委細承知しました此後天機を伺うたる時必らず叡聞に達しませふ、扨斯程までの御心情を承る上は、拙者一己の存じ寄を申入度事もございど、他聞を憚る点もございれば、失禮ながら御夫人も暫く爰に御遠慮下され、ソレ

奥、鶴の間に燈を點じ、人拂ひせよ、郷も暫く遠慮せよローゼン男サこちらへと勸めに隨ひローゼンは主の一聲鶴の間へ伴われてぞ入にける、跡に夫人は唯一人窓透徹る芝浦の沖に繫げる船あかり、波の間に〳〵きらめきて、瞬く星の宵景色、見るに付ても越方の偲ぶに餘る憂思ひ、アヽ、定めなき世の中や、去年の今宵はいかなりしぞ、明日はお國の紀元節と夜の明るのを樂しみに所天と共に花馬車に曠の衣裳を着飾りて、竹の園生の御饗應只一年の其内に其日もかへず此有樣、國と國との鬪ひには、敵味方と隔つれ共人と人との間には仇も恨みもなきものを私同志の音信をかはす事さへ協はずとは是非もなき成行やと夫を思ひ世をかこつ女心ぞ健氣なれ、折しも奥よりローゼンは稍打解し顔色にて主の男爵共々立出「サ奥只今男爵閣下から御親切な御

話を承わつた、いつ迄いうても御名殘は盡ぬ、サア御暇いたしませう、ナニ男爵殿御多忙の折から故明日の御見送り抔は是にてお斷申上ます夫「左樣ならば御二方樣久しく御世話を戴きました御暇申上まする夫「是は御夫婦、誠に御名殘おしう御座ります御機嫌よろしう御出發遊ばしませ、小「ヤ、ローゼン男御夫妻、海陸無事に御歸國を祈りますシテ是より直に元公使館へお歸りですか。「イヤ晝は人目を憚りますが、夜に入たを幸ひに櫻田御門外までも參り、宮城を拜し、兩陛下へ餘所なからお暇を申上度思います小「夫は一段御奇特の事、併し頓て目出度く平和克復の時重ねて御目に掛る場合も有ませう、平和の時をと男同士、御緣があらばと婦人同志、つきぬ名殘の長廊下、禮儀正しく引別る、千歲と願ひし日本に僅かに越ゆる三年坂、まだ咲き初ぬ櫻田の花

の都の見をさめかと夫人は猶更ローゼンも名殘惜しげにのび上り見上ぐる月も霞か關雲井に聳ゆる御所の方伏し拜み〳〵日本帝國　皇帝陛下御寶祚萬々歲、　皇后陛下御寶算萬々歲、久しく御恩を蒙りたる露國派遣の外臣ローゼン夫婦の者、九重遙かに御暇申上奉ります、こひれ伏し、頭もいと重き御恩は仇の國民にも及ぶ惠みの有がたさ、見返り〳〵出て行、頓て目出度く平ひらぎの成る日は又も來ませよと大宮官に歌はれしローゼン公使の退京と後の世までも傳へける。

國民教育

新作淨瑠璃

明治天皇御聖德

殉職驛員泉下感泣

渡部松菊齋作

上の卷　特別大演習門司驛御通輦の段

明らけく治まれる世の大八洲今波風は騷がねども。治に居て亂を忘れなと。皇軍演習をみそなはす。大御心ぞ畏こける。時しも秋は闌なはに。肥ゐ立馬の嘶きも、雲に響きて空高く。冲る旭日の大纛影仰ぐ。同胞六千萬諸聲揚げて　皇君の。寶祚千代ませ八千代ませと。こゝろ筑紫の野も山も。紅葉の錦重ね着て。行幸を迎へ奉つる移る晷は。射る矢より速渡の瀨戸の門司が關。今日　鳳輦の御通過と。驛を守りの司人。準備をさ〳〵怠りなし。搆内主任清水

正次郎部下一同に打向ひ。

「待奉りし鳳輦も。愈々本日午後零時卅分當驛御着。直ちに御發車の御確定なれば。各豫定の順序を過たず。百事遺算のない樣にせんには。到底一人一己のよくする處でないから。協同一致の力に俟ねばならぬ。近來當門司驛に於て事故殆んど皆無の域に達したるは。他に對して誇りとする所で。畢竟一致共力の結果と思はるゝ。殊に今回行はせらるゝ特別大演習地の玄關口とも云ふべき要路に當り最も榮譽ある事だから。頃日來寢食を安んぜず。渡邊驛長首め助役同僚とも協議し。赤誠事に當るの決心で。若今回の作業中。萬一の事あらば。御互ひに軌道を枕にして其責任を盡すべしてある。一同が其覺悟にて愼重の態度を以て勤めて貰いたいです」

といと細やかに言ひ諭し一同は異口同音に

「委細承知しました。貴下が數日前から早出遲退け。諸事に御心配なさるは皆見認めて居ります。殊に十年の間一日の如くに。梅干入りの握り飯。竹の皮包の辨當で。食堂では晝食をなさらぬ程の御勉强は。到底凡人の出來得る事でないと。皆感心して居ります。只今御諭の旨は承知致しました。御安心下さりませとしめし合する折からにはや下の關海峽を御渡航あらせられ。御上陸に間もなければ。時刻はよしと一同は。銘々任務に從ひて。御料鳳車を本線路に。入換んとする其折しも。遽かに吹來るあら風に。御車覆ひをまくり立。ポイントに絡み着。吹煽らるゝ勢ひに。ポイント忽ち轉換し。ボイントメンは刎飛され。どふと倒るゝ一刹那。御料鳳車は端なくも。軌道を外れ馳出たりエヽしまふたと清水は猛

然脫兎の如く。構內全部をかけめぐり。部員を勵ます有樣は。目ざましかりける行動なり。必死と成て一同が。力を盡し漸々と。元の軌條に引直せり。思ひもよらぬまが事に。稍一時餘を便殿に待たせ給ひし御事とて。群臣一同頭を低れ。恐れ畏こみ奉る。天恩海岳啻ならず。御氣色もかえさせ給はず。龍顏殊にうるはしく。玉步を運ばせ給ひつゝ。御鳳車に召し給へば。群れ集まりし數萬の臣民。寬仁大度の叡慮に。感じ入りける折こそあれ。舳艫を啣み海原に。迎へ奉りし艦隊より。一度に打出す祝砲の。天地に轟ろく聲諸共。御車軌らせ進ませ給ふ。殘る烟の消ゆる迄御あと見送り奉り。清水は兩眼血を濺ぎ。恐れ入たる風情にて身をひれふして居たりしが稍あつて顏を上げ。

「チエ、過つたり殘念至極。千載一遇の大事に當り。構內總務の

大任を蒙りながら。圖らずも御料の鳳車に故障を生ぜしは。天命とはいひながら。我承はる職分に對し。御詫の申上樣もなく。恐れ入奉る。

ア、玉座の設けも備はらぬ。いぶせき驛の側に萬乘の玉體を容れさせ給ひし御事の。アナ勿體なや畏こやと。負ふ任務の過失を自己一個に引受る。身を鐵柵に打つけて。惜み涙にくれけるが。餘所の見る目も女々しやと。塵打拂ひしほ〳〵と。驛長室に入り來り。

「驛長。不肖正次郎も。貴官の御恩顧によりて。十三年に亘る服務中是迄大ひなる過失も致しませんでしたが。一生一度の榮譽ある。今日といふ今日。不慮の變に依つて。個樣の事故の出來ましたは。終生の遺憾のみならず。臣民として恐れ入た事で。何共申譯無

い次第でございます。

と血走しる眼に涙を浮べ。無念を忍ぶ有樣を見る驛長は詞を整し。

「宮廷列車の運轉に付ては以來注意に注意を加へ。又足下も平素の熱誠を發揮し。愼重に氣を配られ。要所〳〵に熟練忠實なる者を撰み擧て配り置たるにも關はらず。此の如き椿事は。拙者に於ても遺憾且恐懼の至りであるが。實際取調べの結果は。風の爲御車覆を吹付られポイントが自動的に轉換したのだから。全く抗ぐべからざる天災とはいへ。原因の如何に係はらず。此の事故の爲に御發車稍一時間の遲延を來したしるは。當局者一同恐懼の外はない。併し決して足下一人の不行屆の爲でもなく。畢竟天災なれば止を得ぬ。只不幸中の幸ひともいふべきは是が御乘車

後の出來事で無つた事である。殊に有難きは。龍顏うるはしく御發車遊ばされた御事である。既往は致し方もないから。當局一同謹んで寛大の御沙汰を待奉る外はない。足下もさう一概に思ひ詰てもならぬ。是からは一層職務を大切に御互ひに精勵せんければなるまいと思ふと。物柔らかに理を盡し詞を盡し慰むる正次郎も面を和らげ。

「驛長の仰の通り。御咎の御沙汰もなく。龍顏常の如く御發車遊ばされたるを拜し奉る程猶更恐れ多いのです。最早取かへしのつかぬ事で致し方もありませんから。爾後ます〳〵精勵して今日の御詫を申上ましやう。ヤ、時に驛長。話が他事にわたりますが。私も十餘年の久しき間。日當廿八錢の驛夫時代から御いたはり下さりまして。今は分に過たる判任官に御登用下さりましたの

みならず私の家事に付ても種々御世話を下さりまして此御恩情に報ゆる事も出來ませぬのは誠に申譯もございませぬ貴官も御からだを御大切に此上共に我々夫婦の者御見捨なく御愛顧を願ひます。

と餘所ながらなる暇乞ひ。こは知らずして驛長は

「足下そんな陰氣な話は止さふぢやないか。チヽ最う六時過だ。俺もちよと歸つて來る。ヤ今夜は内慰勞會でもやらうから。後刻に遊びに來給へ

と言ひ慰めて立上れば。清水も挨拶そこ〳〵に我家〳〵へ別れ行

爰に門司市の片邊り。鐵道院書記清水正次郎が邸と云は名のみにて儉素なる詫住居。町の名さへも丸山と圓う治まる女夫中。風

溫かき家庭なり。秋の日あしの暮近く。港に繫る百船の燈影も淡き黃昏時。立歸る正次郎。常にかはりし屈詫顏。キカ子目早く立よりて。

「チヽお歸り成さりましたか。取わけ今日はお勞れでございましやう。サおめしかへ成さりませ

と着換の衣服取あへず。脫す所天の勸め着と。折目正しくたゝみ付。今朝召替た肌襯衣。只一日に此樣にしぼるばかりの汗のあと。いかふ激しいお勤めやら。妾は夫に引かへて。疊の上の留守仕業。思へば却つて勿體ないと。いひつゝ傍への掛掉に。かけかまひなき夫婦中。所天の機嫌とり〳〵に忠實〳〵しくぞ立回る。正次郎は何氣なく。衣服をかへて座に直れば。サお茶一つと差出し。所天の顏を打ながめ

「此程から一こかたならぬ御心配遊ばした。御車も滯りなく御通過遊ばされ。嘸御安心でござりましやう御勞れの故でもあるか常ならぬお顏の色。氣分でも悪いのではござりませぬか。と見咎られて正次郎。ハツと思へど左あらぬ体

「イヤ別に氣分も悪うもなし。又日々に馴た勤務の事ゆへ。さして勞れも覺ねぬサ「左樣なら直ぐ御飯を召上りますか「イヤまだ欲しうない。最うつと後にしてくれと詞は常にかはらねど。虫が知すか何とやら。心に掛る所天のそぶり。

「今日は兼て承はり居りまするより門司驛の御發車が後れた樣に伺ひましたが。何故でござりましたとうら問ひかゝる妻の詞正次郎は溜息つき。

「アリヤ實に恐れ入た次第であつた。大切の御車故覆を掛た儘倉庫から引出して置て。愈々御着の間際に至り。掛りの者が夫々任務につかんとする時。俄かの風の爲に御車覆が吹まくられ。ボイントへからみ着たので。いかにも手の付樣のない折から。遂に御車が軌道を外れ。夫を元に復する迄に。稍一時間を費した。恐れ多くも其間空しく御待せ申上る次第。當局一同恐縮して申上る詞もなかつたが　至尊には微さか御氣色も變給はず。御平常の如く龍顏うるはしく。御發車遊ばされたが。殊に搆内任務に當りて居る拙者は一層恐縮の極みで。今思ひ出してもぞつとして。背中に水をかけらるゝの心地がする。是が大演習の行幸なればこそまだしもの幸なれ。若實地戰爭の時で有つて。大本營への御着が。御豫定より一時間後れたりとせば。軍機の上の一大事と考ら

る丶其時に。我々如きが。百千の命を捧げても詮なき事。ヤ。是は序に云て置くが。鐵道員が戰時に對する勤めは。軍隊兵器糧食等を其機を誤まらず。安全に輸送すべき大責任を持て居るのだから。軍人が戰場に出て働くと同樣である。デいつ何時其職務の爲に斃るゝ事もないとは限らないから。鐵道員の妻も軍人の妻同樣に豫てからの覺悟がなければならぬぞよ

と他に擬らへて言び諭す。樣子知らねば妻キカ子

「ハイよう心得て居りますが。萬一にもそんな事が有てはなりませぬ永らくの御心配。御勞れでござりましやう。今夜は早うおよりませや

「イヤ明日は非番休暇だから。是から引繼の點呼に最一度驛へ往ねば役目がすまぬ

と死る今はの際迄も。自己が負たる其責の任務に盡す眞心は。實に世の人の鑑なり

「それは〳〵御苦勞の事直にお歸り成さりませや

「ヤ又思ひ出した事がある。今夜は是非馬關へ行く用事が有た。點呼を終りて序に行かもしらぬ。歸りは最う船がなからうから。事によれば一泊する。明日は非番で事務の方に氣がくりがないから遲ふ成ても心配するな

「マア此寒いのに御苦勞や明日にお延ばし成さりませぬか。

「イヤ延引ならぬ急な事。エヽ奮發して今夜往かう。

「左樣なら。此綿入羽織を召てお出なさりませと所天の後ろに立廻り。着するキカ子の手を握り。これが妹脊の名殘とも。しらぬ不憫さいぢらしさ。ゆるしてくれも口の中。せきくる涙のみこん

で。

「ヤおまへの手は大そう冷たい。ナ、風をひかぬ樣に注意せよ。ドレ往て來るぞ

と言捨て立上る。二世の契りの別れとは神ならぬ身の女房が揃へて直す履物も。夫婦の緣のあさうら草履。踏違へせぬ眞心の。直なる道を一と線に。行衛は幡生一の宮。跡くらまして出て行。

下の卷　故清水正次郎祭粢料恩賜の段

去る程に清水正次郎は。這回行幸の御鳳車に故障を生ぜしは天災とはいひながら。己が誠の足らずして。其職分の過失と唯一向に思ひ詰め。無慚の最期を遂たるは聞さにいとど痛しき。遺骸を我家へ送られて。妻が手向の香花も。薄き緣の薄けふり。枕屏風の

逆さまな部下へつとめと驛長も。今宵は通夜の伽の役。弔魂堂の瑞園和尚未來を助くる枕經。讀誦の聲も寂しけり。

「大聖世尊遺敎經に曰はく汝等當知世皆無常。會者有離世相如是當勤精進すべしと。諸行無常の春の花は是性滅法の嵐に散り生滅々己の秋の時雨に寂滅爲樂の紅葉を染む。一死作善の功力に依て明莊嚴の悟を得。俗名清水正次郎。離苦得樂頓生菩提。

と回向に時ぞ移りける。遠く離れしいとし子の。病ひ篤しの報知により。母の心は京都より。三百哩一日に走る汽車さへもどかしく子故に胸もくらやみを。そこや爰やの軒燈標のもじの丸山に。清水と書し家の門。扨は爰ぞと內に入る。キカ子は火影に目早く見付

「チヽお母樣思たよりお早いお着。おつかれでござりましよう

と挨拶もはや涙聲。母のお米も取あへず

「チヽ嫁女日比健康な正次郎が。急病との電報ゆへ。驚いて來ましたが。和尚樣のお經の聲は。本復願ふ御祈禱か。臨終の御回向か早ふ聞かして下されと問ひ掛られて今更に。只泣居たる計りなり。驛長は傍はらより

「ヤ貴女は清水君の母御でしたナ。俺は渡邊です。

「チヽ是は〳〵驛長樣でござりましたか。御見それ申ました。此度は正次郎が急病との事。嘸御世話樣でござりましやう。有難うございます。

「清水君の事に就ては世に憚る次第がありまして。急病とおしらせましたが。最うおかくしするわけにもゆかぬが。實は今度特別大演習行幸に付て。御召車の掛を務められたが。天災の爲に故

障が出きたる爲。自分の職務に對し恐れありと思ひつめ。俺には無論。家内のキカ子殿にも何も申さず。家出して一昨夜馬關の先の幡生と一の宮との間の隧道で。遂に自殺をせられたのです。

「エヽ左樣なら忰は。役目の爲に自殺したのでございますか。

「ハ嘸御驚き御愁傷御察しますが。どふぞ御諦らめ下さりませと聞より母は今更に。力も落てどふと伏。しばし詞もなかりしがはじめて夫と心付。

「チヽ今日來る滊車の道すがら。一の宮のトンネル近くで。某鐵道の役人が。滊車に敷かれて死んだとの。噂は聞て居ましたが。勤め場所も違ふて居り。ことに病氣と心得てよもやと思ふて居りましたが。扨は忰でございましたか。ノウいたはしや情なや。死顔なりと見まほしやと。

立掛るを驛長制して

「イヤ先暫らく。御待下され。御尤の事ながら。能く事情をお聞なされてから其御覺悟で遺骸にお逢ひなされ。さもなき内に御覽成されて。お歎きでもかゝりては。却て清水君の靈魂の爲宜しからず。ソレキカ子殿お前さんからお母様へ。能く御話しなさいといふにキカ子に涙ながら

「思ひ掛ない今度の事。其日退て歸られた時。顏色のわるひので。どうした事と聞ましたら。一世一度の榮譽ある。大事の役目を過ちて。恐入た事ながら。すぎた事は仕様もなし。今から一ト際精出して。今日の御詫をせねばならぬ。是に付ても云ふて置くが。鐵道員の妻は軍人の家内同樣。其所天が勤の爲。いか成事が有たりとも。決して歎く事でない。常に覺悟をして居れと。さま〳〵の話の

末。明日は非番休暇だから是から驛へ點呼に行く事に依つたら其序に。馬關迄行用事もある。若遲ふなりて。泊りても。心配すなと言ひ置て。機嫌よく出られたのが長の別れでござりました。

斯ならうとは露しらず。あまり歸りの遲いのは。いかなる事かと案じ詫待あかしたる昨日の朝。幡生の先の隧道で。非業の最後を遂げられたと。多くの人に亡體を運ばれて來た其時は。夢か現か幻か。餘りの事の悲しさ。此胸が裂るかと。思はれましたと伏沈めば驛長も聲くもらせ。

「人間わざでは防げぬ事を。役目の失策と思ひ詰め。能く覺悟を定めたので。見苦しい死顏を人に見ぜじと思ふてか。ハンカチフを以て顏に當たる。其注意の奥ゆかしさ。又硯に向て書置するひまもなかつたと見え。持合せの電報用紙へ。鉛筆もて片仮名で。認

めた二つの書置を片手にしかと握り詰め實に立派の最後を遂たのです。其書置は此通りです。能くお聞下さい。チンメシレツシヤイレカヘノサイ。ジコニカ、リアヒ、ジツニザン子ン。ゾノバンジサツスルツモリナリシモ。セキニンノハンメイセヌハ。エキチヨーサンニスマヌトチモヒ。アラカタセキニンシヤモワカリシヨツテ。カンブニモチシワケノタメジサツス。シミヅ、シヨウジロウ。ゾウサイ。キヨクチヨウ。カクカチヨウ。エキチヨウ。ドウレウカン。此文体を見るに確き決心と見ゆる。去りながら世はさま〳〵の人心。是を輕卒の所業とか。心狹き行動とか。誹る者もあらんなれども乃木大將の歌と承はる。時鳥おのがまに〳〵啼聲を。心々に。人は聞なりの如くで。血を吐つゝ啼時鳥を。あはれと聞人もあり。をかしと笑ふ人もある。かしましと忌む人もあらんが。今世界

の有様は。道德次第に廢れ行き。某外國の鐵道員は私の感情より同盟罷業を企てゝ。社會交通機關の責任あるを辨へぬ者さへある世の中に。捨がたき命を犧牲にして。其責任を重んずる。清水君の様な人がいわゆる日本武士道の花ともいふべきでしやうと詞を盡し懇ろに諭す傍よりキカ子もともに

「今驛長様の仰しやつた書置の一つと云は妾へ宛でございましたとあへなき書置取出し

「アトハヨロシクタノムヒトクチモシラセヌハ。ユルシテクレツマキカヘ。シヨウジロウ

「そんなら。何もあかさず死んだのを。ゆるしてくれといふのかいノウドレわしにも見せて下され

遺言さへもかたかなの血汐に染る筆の跡。是が今はのかたみか

と。顔に當身にそゐて。なつかし涙にくれたり。瑞園和尚も讀經終り。

「臨終正念の枕經もすみました。サ母御正次郎殿の亡體にお逢なされ御燒香もなさりませ

といふにキカ子が立寄て。經帷子をひきのくれば。見るも無慘の死態に母は今更堪兼て。わつと計りに泣出し

「コレ〳〵正治郎。母ちや。正次郎ノ〳〵。エゝむごらしい死をせられたノウ。いかに覺悟といひながら。疊の上で死す事が。生落して より卅餘年。ごこに一つの疵もなく。育て上げたる此からた。鐵の線路に横たはり。首も手足も切〳〵に見るも無殘の最後やと。歎けば妻も諸共に。ほんに思へばいたわしや。今死に行其夜迄。職務の大事と忠實に。勤め終りて其上に。死る場所迄見定めて行るゝ程

に張詰し覺悟の上といひながら。日比案じて在します。お年よられた母樣に。お心ひかれし事ならん。此書置に其事のない程猶更いとしやと。むなしき死體の右左り取付き歎く有樣に。傍に居合す人々も。こらゐ兼たる供涙空にしられぬ村時雨。晴間は更にしらき崎波打寄る如くなり。瑞園和尚しとやかに

「其御歎きも去る事ながら。清水殿が職務の爲に。線路を枕に死れたるは。軍人の戰死と同樣。却て死所を得たりと云べし。昔大聖釋尊も。衆生濟度を勤めとせられ。四十餘年の難行苦行。天蓋さへなき沙羅双樹の下に涅槃に入らせ給ふ時迄も。生者必滅會者定離。汝等比岳悲しむ勿れと說給ふ。歎きは却つて佛の爲によろしからず。唯因緣と諦らめて。追福作善に怠るな。といと有がたき敎訓に。二人はつと渴仰の首べを低るゝ計りなり。かゝる處へ驛

丁は一封の書を持來り

「只今此書狀驛長の御手許へ屆け來よと助役殿より申付られました

と差出す一封押ひらき

「故清水氏殉職に同情を寄せられ乃木大將閣下ゟ弔慰金五圓也。遺族へ交付方御依賴相成。且一己の寸志に付。名義を發表せざる樣にとの仰越に候間受領簿には御姓名を記載致し置。發表の場合には。某將軍よりと披露致すべく候。久留米大本營よりの書狀は貴官宛親展書に付。御手許へ御回送致候也。渡邊驛長殿。神山助役より。

と見るより驛長眉をひそめ。何事ならんと押開き。

拜啓今般陸軍特別大演習の爲。福岡縣下に行幸の際御料列車に

事故發生致し候所。全く不慮の原因たるに關はらず。鐵道院書記清水正次郎氏は恐懼の余り。一死以て其罪を謝すと遺言し。悲慘の死を遂られたる趣に有之。誠に同情に堪ゑざる次第に候。事畏こくも　天聽に達し。憫然に思召され。特に祭粢料金三百圓遺族に賜ばるべき御沙汰有之。感激の至りに堪ゑず候。就ては死者の靈を弔し。且つ遺族に對し聊か慰籍の意を表せんが爲。些少ながら別途金五十圓。奥參謀總長。福島參謀次長。宇津宮第二部長並に本職より御送附申上候間。遺族に傳達方然るべく御願申上候。參謀本部總務部長。陸軍少將大島健一。門司驛長　渡邊六一郎殿

と讀も了らす驛長は。夢かと計り恐れ入り

「清水の死畏こくも　天聽に達し。祭粢料を下し賜はり。參謀本部各將軍を首め。殊に乃木大將閣下より。弔慰金を下されしか。ハ

、有がたやかしこやと御書を取て推戴さ。悅ひ涙にくれ居たり。

聞より妻も母親も有がたなみだ諸共に。

「コレ正次郎お前の最期が雲の上まで聞え上げ賤しき身分に勿体ない。御惠み金を賜はりしは。末代迄の家の譽れ。草塲のかげから此御恩に報ゆる事をしてたもや。

「今お母様の仰しやつた通り。御喜びなさりませ。又生た軍神様と。世に尊まるゝ乃木大將様をはじめ。貴い御身拵の方々より。お惠み金を下さりました。後は宜しく賴むといふ。御書置もありましたが。決して苦に成されずに。極樂往生して下さりませ。

といふも涙のくもり聲瑞園和尙は。法衣を整し。これぞ世尊の不求自得後生善處の利益ぞやと。和尙が詞一同は君の惠みの畏こさと佛の慈悲の尊とさと。二つの德を一すじに。隨喜の涙果しな

き。實に鐵道の營みは。敎えの道に似たる哉。老若男女おしなべて。善惡邪正戀無常。皆一樣に載せ將つて。其ポイントを過またず。直なる道に誘ひ入れ。緩急疾徐に注意して。暗路を跼り險を超に。進み〳〵て末ついに。豫て見當を定めたる。安らけき地につかしむるは。車あやつる人々が。皆眞心を一ツにして負ふ任務の重荷を。斃るゝ迄も推徹す。力にこそはよるならめ。

壬子歲六月作於門司市旗田山鐵道殉難者弔魂堂故清水君墓下併題

鐵石丹心殉職權。　從容就死謝　天邊。　愧吾無慰幽魂語。一曲悲歌薦墓前。

渡部松菊齊

新作淨瑠璃

兒島高德行宮櫻

船阪山より院の莊に至る

渡部松菊齊著作

家貧にして孝子出で國亂れて忠臣顯るとや、爰に備前國の住人兒島三郎高德は勤王の志厚く、幾回か義兵を擧たりしも南風遂に競はずして事常に志と違ひ、時の到るを待つ處に、這回帝左遷の風聞遠近に傳ると齊しく、撤を四方に飛しければ響の音に應ずる如く一騎當千の兵原、馬武器を引具して船阪山の絶巓に先を競ふて集まりける、一同「三郎殿の急撤に應じ、今木太郎範長、同次郎範仲、和田五郎範民、松崎彦四郎範家、中西四郎範顯、谷村大學利連一同參着仕るシテ今回の御企ては何事に候ぞ聞まほしく候

と各々鎧の袖かき合せ、勢ひこんでとひければ高德欣然として形を改め「高德が不肖を捨ず、早速の參着、祝着至極、各方も聞つらん、相模入道殿の暴惡無道、這回畏くも天皇を隱岐の國へ遷し奉る由、夫れ志士仁人は生を求めて仁を害する事なく、身を殺して仁をなすにありといへり、實に忠臣命を致すの時なり、イザヤ此處に御通輦を待受け、乘輿を奪ひ奉り、四海回復の旗を揚げ、逆賊を打亡し萬民の塗炭を救わん爲、義軍を起さん企なり、赤誠面に顯はして相述のぶれば」「潔よき御企、思ひ回せば去年九月三郎殿の主唱により、笠置の行宮に馳せ參じ、一臂の力と思ひしの足助次郎重範を始め、錦織判官代も勢ひ盡笠置も遂に落城し、折から、同月晦日の夜軍に、陶山小見山の謀計によりさしも武勇無念の月日を送りし折から、此度の御企、我々の願ふ處、義を視て

せざるは勇みなし、此一擧に鳳輦を奪奉り暴惡無道の逆徒原の荒膽ひしきくれ申さん、シテ此通輦の御日取は貴殿確かに御糺しありしや」「されば當月七日、都御發輦にて山陽道御下向の事は間者を以て探り得たり」「シテ御行列の御次第御警固の武士の人數は如何に」「其事委く探らん爲郎等谷村幸八を播州路まで遣したれば今にも歸りて注進あらん、抑も此船阪山は山陽道第一の險峻にして、最究竟の要地なり、天の時を得地の利を得其上斯く各が同心一和するからは、何の大事が成らざらん」「御綿密なる御計らひ、今しも鳳輦至りあば、三郎殿を首領と仰ぎ刃の續く其限り、警固の武士を切散らし、乘輿を奪ひ奉り朝敵退治の旗上せん事、誓つて此一擧にあり、ハテ心地よき事で御座る、各々兜の緒引しめ、かいなを擦り、太刀を撫し、今や〳〵とまちかけた

り、斯る處へ麓下よりいきせき馳來る武者一騎、夫れと見るより三郎聲かけ（高）待兼し谷村幸八、遷幸の御道筋、警固の次第は如何に〳〵（谷）「さん候仰の如く、百性姿に身をやつし、播州地まで罷越しひそかに樣子伺ふ處、主上は三月七日都を出でさせられ玉ひ供奉には一條の太夫行房、六條少將忠顯、御介添は三位殿の御局計り、警固の武士は千葉介貞胤、小宮山五郎左衛門、佐々木判官入道々譽、隱岐判官清高、塩谷判官高貞等、其勢都合五百餘騎と注せられ皆甲冑を帶せし武士前後左右を取圍み、明石の浦まで來りしところ如何なる仔細の候や、夫より俄に御順路かわり二日以前に今宿より、山陰道へさしかゝり、杉阪越に美作なる、久米の佐良山の方へ到らせ玉ひたる御跡なりと承り、殘念あがら取あへず立歸りて候と聞くよりはつと驚く一同、あまりの事に詞も出

ず只茫然たる斗り也、三郎無念の大息つき、（高）「チエ又しても殘念至極、奸智にたけたる都武士在々處々に勤王の士あるを慮り山陽道を下向なりと僞りて世に披露し、態と道を轉ぜしよな、一度ならず二たびまで、斯く肺肝を碎きしに又も畵餅に屬せしは、我黨の忠心まだ盡さざる處ありて精神天に通ぜざるか、去るにても又朝廷の御運開かせ玉はざるか同士の各々一回、高德殿ナエ是非もなき武運の末と遙かの空を打見やり天を仰ぎ地に腑して無念なみだにくれ居たる、今木太郎つゝ立上り（太）斯く迄心を盡せしに此儘止まんは殘念至極、御順路の變りし上は、此處に居りて詮なし是より直ちに美作地へ逆寄に押出し、佐良山邊にて出會せば五百騎ばかりの集り勢、一戰に追散らし、美事鳳輦奪ひ奉らん各々御用意と有ければ一同再び勇み立馳出んとする處を

高德暫しと押止め「アイヤ各々、心はやるは尤なれども、逆寄せまして切入るは、事を好むにひとしければ後日の再擧に悪しかりなん、夫よりひそかに時を待ち心靜に事を爲さん今谷村の注進によれば鳳輦は最早佐羅山を過玉はん、然る時には猶以て、要害によりて戰ふ處あく、殊に公けに觸れ流せし御道筋を、俄に他道へ轉ずる如き、狐疑奸譎のしれ物ども、勤王無二の我黨を、わさと逆徒の狼籍などと、天聽を驚かし奉りまする〳〵警固を嚴にして其累を玉体に及ぼし奉るが如き事あつては却つて不忠の畏れあり、各々には一ト先本國に立歸り、時節を待て徐ろに義兵の旗を擧げられよと理非明白に言ひ諭せば、一統實にもと了承し一同「三郎殿の御意見一々尤と存ずれば、一同御意に隨ひ申さん、シテ又貴殿の御所存は」「我は是より姿をやつし夜を日に繼ひで

御跡を慕ひ如何ある艱苦を凌いでも、天顏に咫尺し奉り、去年以來我々が心を碎きし義兵の事々も委しく奏上仕り、叡慮を慰め奉らん心底」「今に始めぬ三郎殿の御忠節、一同感心仕る殘念ながら我々は是より本國に立歸る後日の御沙汰を待ち申さん、高德殿」「各々方、イザお別れ申さんと無念を忍び双方が陰陽二タつの別れ道、北と南と隔つれど、義を金鐵と固めたる心は一ツ三ツ石の峯を辿りて行空の海避る鄙も浮世の風すさみ、腿たる花を美作の春もさびしき院の莊、御痛わしや後醍醐天皇、武家の跋扈を疾ませ玉ひ、王政復古の御企ても時到らせ給はずして、端なく敵に洩れ聞へ、相模入道の怒りに觸れ住馴給ひし九重の都を出させ給ひしより、萬乘の玉體も何れの地へか隱岐の島、御左遷の道すがら此處に御輦を駐め、一夜を爰に假の御所、習わせ給は

ぬ御旅路を、慰め奉る人として、あらくれ武士の警固の中、頼みなき世の有樣を思し召されて御袖の乾かせ給ふ隙もなく今宵もいたく更渡り吉井の川瀨音さえて、軒端に戰く松風も御まどろみを破るらん、外面を守る番卒の詈る聲も靜まりて、しん〳〵たる御殿の内、三位の局は只一人、御座所を罷る隔ての間、雲路の遙かに啼連て、古棲へ歸る厂かねに都の空の偲ばれて、いとゞ思のかこちごと、三アヽ、お痛わしや御上、回顧ば去年の秋、六波羅勢の夜討にかゝり笠置を出させ給ひしより、武家の權威に制され給ひし七月餘りの明暮に、勿体なや玉体を安んじ給ふ處さへ、あら波高き隱岐の國へ、御さすらひの事と定まり、御傍に侍る仕人さへ皆武家の指圖にて、一條太夫行房卿、六條少將忠顯殿と百官百士も唯二人、女御更衣も女蔦にも冊き奉るは自から一人、昔思へは

百敷の大宮人と歌はれて、櫻かざしてくらすてふ、都の春を後にして天逆る此老里に、花の色香も世につれて、うつろひ果し薄櫻、鬢わせ玉ひしして、御心慰む樣もなく、晝は嶮しき山坂を、習はせられぬ御旅路、夜はいぶせき行宮に、世のあぢきなき成行を、思しつゞけ給ひてや、ゆめまどろませ玉ふ間も、あらせ玉はぬ御有樣、一天四海を知ろしめす、皇帝の御身の上にソモおわすべき事なるか夢か現か幻か、あはれ神といふものは、此時世には在さぬかと、聲を忍びて泣給ふ、ばや丑三つを告渡る、遠山寺のかねてより、何處にか身を賤の男と、うはべをつゝむ蓑笠に、人目を掠め悠々と虎の窟へ探り入る、備後三郎兒島高德、衛士の焚く火は消かゝれども燃るが如き熱誠に、氣は滿月と弓張のやわか仇には歸らめや、警固の武士の眠れるは、天の佑けと獨り笑み、猶奥深く忍び

行く笠脱ぎ捨て恭しく、御座所とも覺しき處、ひそかに垣間見奉れば三ッ鱗の幕引廻し、殿居の武士嚴そかに備へ、耿々たる燈火の光りの下に侍從の人影おぼろにうつれるは、扨はまだ御殿こもらせ給はずや高德爰に侍り候、物あ思はせ給ひそと心の内にくり返せど、聞へ上ん樣もなく、只一重なる竹垣も、築き立たる鐵壁を、隔つる如き思ひなり、高德熱き涙を押へ高あはれ一ト度龍顏を拜せんものと一ト筋に、御跡慕ひ參りしかど、斯く嚴そかの警固の中、忍び寄るべき由もなく、よし又あらはに切入るは、心安き業なれども、御座所近く騷立て、聖聽を驚かし奉らん事却つて不忠の恐れあり、左はいへ此儘立歸らば、又何の日か龍顏を拜する時の有べきと二度三度低徊り、御垣の本に身をひれ伏し無念涙にくれ居たり、漸々に心付アヽ、思ひ出せし事こそあれ、昔し越

王勾踐が吳王の擒と成りし時其臣范蠡なる者主君の心を慰めんにも、見ゆる事のかなわねば、商人に身をやつし、魚の腹に書を容れて、囚の中へ差入しに、勾踐之に力を得、多年の艱難辛苦を忍び、遂に吳王を攻亡ぼし、會稽山の敗北の、耻辱を雪ぎし例あり我が眞心も何かに記るし、聞に上げんすべもやと、獨喞ちつゝ立上り、何とせん方月影に見廻す庭の側へなる、今を盛りの櫻樹は是究竟と立寄て、腰刀持て削りつゝ、矢立の墨のくろ〳〵と、寫しあわす敷島の、やまとごころを唐詩に、書認むる折からに、夜を警しむる番兵の擊拆音の聞ゆれば、今しも廻り來ぬらんと、笠傾けてひそ〳〵と柵の外面立ち出しが、いかに名殘や惜しかりけん、又振回りて遙なる、御座所の方に打向ひ、再び大地にひれふして

高草莽の臣備後三郎高德、是より奏上し奉る、河内の判官正成は、

君が笠置の御夢に入り、御味方に徵させられしと承る、高德不德不才にして正成が軍畧智謀には比すべき樣は候わねども、君を思ふの誠忠は決して人に後れぬ某、あはれ微臣が精神、天の感應あらば、御まごろみの幻しに成りとも、九重遙かに聞し召されて給へ高德微弱の身を以て、朝權の振わせられざるを慨き、相摸入道の恣まゝなる行動を、殊に無念に堪ざる折柄君聰明叡智に渡らせ給ひ關東御征伐の御企にて笠置の城に籠らせ給ひ、勤王の士を招かせらるゝと承はり、是非御味方に參ぜんと、忠心無二の一族を語らひ、密かに軍議を凝す折しも、陶山小見山の夜討にかかり、笠置の御沒落ア、時至らざるか是非なしと無念に月日を送りし中、益々募る入道の暴威、勿体なくも玉体を隱岐の國へ移し奉ると決定し、日ならず山陽道を御通輦と承わり、スヲ時こそ來れり、鳳輦を守護し奉り義兵を擧るは此機にありと、又一族を驅り催し、船阪山の嶮に依りて鳳輦を待奉りしに豈に圖らんや御道線は、俄に山陰道に替らせられ、はや久米の佐羅山を過させ給ひつらんと、承わりし其時の、臣等が無念はいか計りぞ、既に集まる一族郎等は皆ちり〳〵に古郷に歸り、高德一人姿をやつし、夜を日に繼て鳳輦の御跡を慕ひ奉り、あはれ一ト度龍顏を拜し、臣等が微衷も聞へ上け、叡慮を慰め奉らんと今夜密かに忍び入、御座所近く至りしも殿居の武士の嚴かにて、せんすべも候はねば唐土戰國の故事に引擬らひ、御庭前の櫻樹に天勾踐を空しうすること勿れ、時に范蠡無にしもあらず、此十字こそ高德が、血の涙を注ぎし處、御目ざめに鬱わせられ、宸襟を安んじ給へア、

かなれば御運拙なく、かゝるいぶせき山里に只苟初の御旅寢